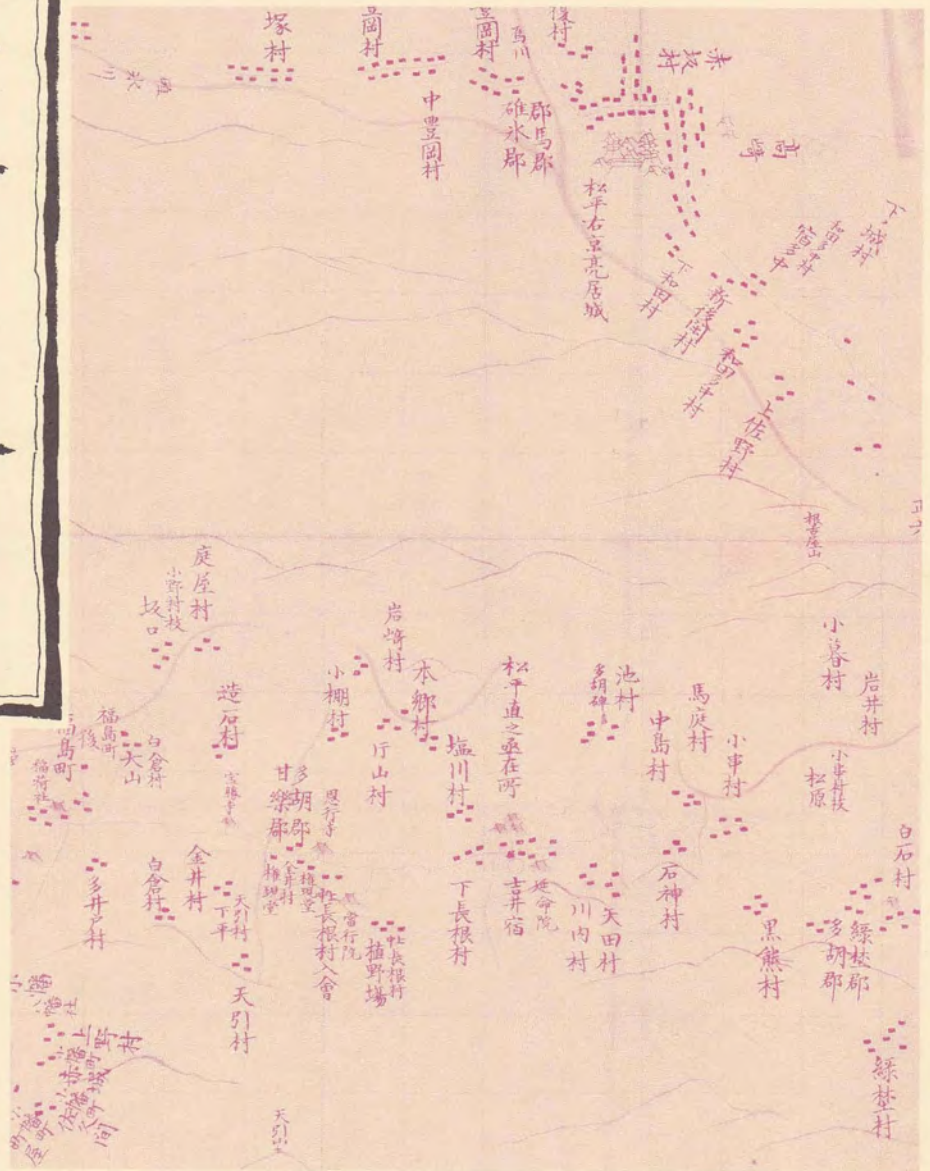


史料と伊能図

# 伊能忠敬

研究

二〇〇五年 第四二号



表紙図解説

米国議会図書館蔵

伊能大図九四号部分「吉井宿」付近

こは文化十一年の春、第八次(九州第二次測量の帰途、江戸に向かつて測られた。中山道岩村田の下仁田道追分から、下仁田、富岡、福島、吉井、藤岡を経て、本庄で再び中山道に出る。現在は国道二五四号線が通る。中山道の脇往還にあたり、本道の厳しい関所や急峻な碓氷峠を避ける姫街道として賑わったという。

九百日を超えた長期の測量行の最終行程で、江戸府内測量を別とすれば、第九次の伊豆七島測量には加わらなかった忠敬にとつて、これが全国測量の納めの部分である。

吉井宿泊、翌五月十一日(文化十一年)、街道を測り進み、途中北へ、日本三古碑の一つ、多胡碑前まで「打上」(分岐)測量に入った。日記に碑文が正確に写しとられている。図上にルートと小さな碑の形が確認できる。北端には高崎城下が見えている。沿道の寺社への短い「打上」線も日記との対比が可能で、この写図の正確さを窺わせる。

(鈴木純子)

(題字は伊能忠敬の筆跡)

目次 42号

忠敬遠景 蜜柑の島と安芸灘  
特別寄稿

伊能忠敬大阪測量200年記念イベント  
伊能図探求

伊能小図を訪ねて  
フォン・シーボルトの足跡を尋ねる

話題

八丁堀亀島町「地図御用所」と伊能図  
佐原村粉名口付近実測図

小倉顕彰会「伊能忠敬献花の集い」  
伊能忠敬図との出会い

詩人みたいな木  
利根川素描

伊能測量記録の発刊―三重県資料  
忠敬ウオーク再び

研究ノート

井田因幡守を偲ぶ脇差  
閑話・「鬼平」と忠敬のご縁

良助の次男・榎本武揚2  
伊能忠敬と久保木清淵との契(一)

佐原市津ノ宮地区図  
伊能蝦夷図と間宮林蔵 余話

忠敬談話室だより  
思いがけなく然り気無く

歩いて感じたTXへの期待  
伊能忠敬の手法を再現

各地に博物館 生誕記念祭メモリー  
お知らせ 大図展の予定

伊能 洋 一

矢口 彰 二

星埜 由尚 四

渡辺 一郎 八

巻瀨 彰 一六

佐久間達夫 二〇

石川 清一 二五

穂吉 正明 二六

武田 威 二八

江口 俊子 三二

編 集 部 三五

数合 信也 六〇

神保 誠 三三

安藤由紀子 三六

伊藤 栄子 四四

佐久間達夫 五一

井口 利夫 六〇

山本 公之 六一

川上 清 六二

小林 清 六二

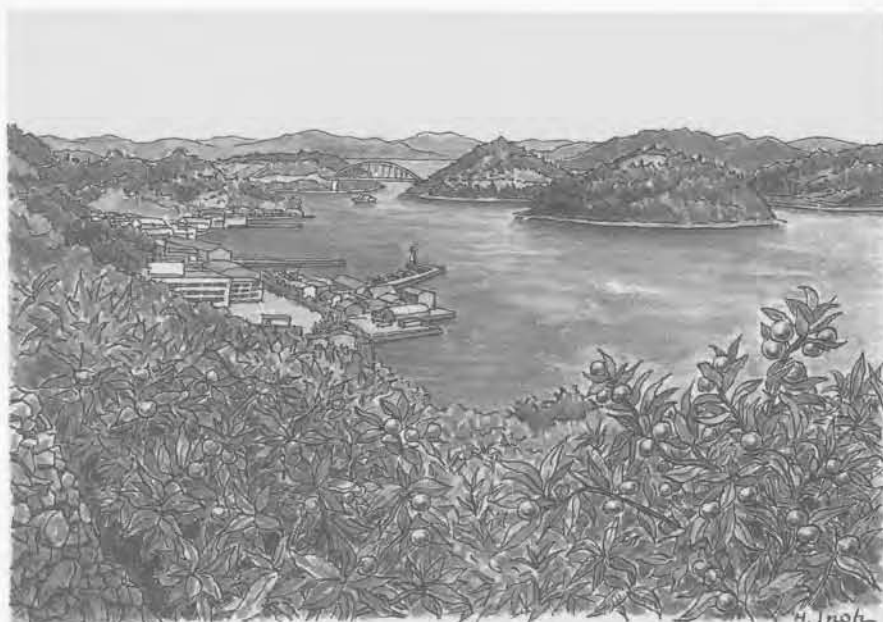
受贈書目 日々の話題

編 集 部 六三

別刷 会報総目次

表紙図解説 鈴木純子 編集協力 伊能陽子 坂本巍 前田幸子

忠敬遠景



(新・田舎人 第45号より)

蜜柑の島と安芸灘

伊能 洋

今回は蜜柑の島、大崎下島（呉市豊町）と決り水土里ネットひろしまの方のご案内で、島を渡り継ぎフェリーにも乗って盛夏の安芸灘ドライブを楽しんだ。豊町は人口約二千八百人、古来瀬戸内海の要衝として栄えた江戸時代の家並みが残る歴史の島で、かつては桃、明治からは大長蜜柑おちようみかんの産地として有名になり、現在ではレモンも加えて標高三百米に及ぶ段々島が山々をおおっている。

市役所の地域振興室の方も画材探しをお手伝い下さり、熊蟬のかしましい蜜柑山の狭い農道を丹念に巡って頂いた。碎石が積まれた段畠は高山のガレ場を思わせる急傾斜で、栽培作業のご苦労のほどが偲ばれた。蜜柑は大方まだ青々としていて摘果作業の最中だったが、ここでも高齢化による労働力の減少と採算性が問題になっているようだ。

伊能さんにぜひ見せたいものがある、と市役所の方に連れて行かれた江戸みなとまち展示館には、何と「御手洗測量之図」の複製が掲げられていた。伊能忠敬の測量風景を写し、忠敬本人が特定出来る貴重なものだ。さらに近くには文化三年に忠敬が宿泊した本陣、柴屋政助の旧宅も保存されていた。この測量之図のことは前から承知していたが、偶々訪れたこの島がその現場とは思ってもせず、二百年を経た先祖の足跡に感慨深いものがあつた。

江戸情緒の残る御手洗の路地を辿ると、家々の千本格子に吊られた投入れの生花や短冊の数にも、町全体が古いものを大切に遺し、旅人を大事にという心意気を感じられた。

因みに、忠敬測量之図とほぼ同じアングルで取材の構図が得られたのは望外だった。

青蜜柑島に遊女の墓の数

洋



## 伊能忠敬・大阪測量200周年記念イベント

矢口 彰

私は、この夏、8月27日に、大阪府堺市で行われた「歩こう！話そう！私たちのみちとまち」ウォーキングとシンポジウムに参加してまいりました。このイベントは、日本ウォーキング協会、大阪府、堺市、近畿運輸局、近畿地方整備局、そして国土地理院近畿地方測量部が主催して行われ、多数の方が参加されました。8月は「道路ふれあい月間」、10日が「道の日」ということで、道路にちなんだ催し物が全国各地で行われます。このイベントもその一つですが、実は、我が伊能忠敬先生も、その開催に役買っておられるのです。

伊能忠敬は、1800年から1817年の間に、十次にわたる測量旅行をしたと言われています。私などいい加減な人種は、これを称して簡単に、「伊能忠敬は200年前に全国を測量しました」と表現するわけですが、よく考えてみると、2005年の今年から見ても、ちょうど「200年前」にどこを測量したのかと言うことは、あまり意識していませんでした。

ところが、この2月に北側一雄国土交通大臣が国土地理院を視察される事になり、できるだけ国土地理院の仕事をご理解頂こうと、大臣の出身地である大阪について、明治期に陸地測量部が作成した地図から現在の刊行地形図まで用意していたところ、「伊能忠敬は大阪をいつ

測量しているかな？」という疑問が、不意に心に浮かんできました。なんと、調べてみると、ちょうど200年前の1805年、2月から始めた第5次測量の中で、8月16日から29日にかけて大阪を測量しているではありませんか。ちょっとうれしい気持ちになりました。記憶に残りましたので、業務説明の合間に、大臣にこのことをお話ししました。

そんな事もあり、「ジャスト200年前」をセールズポイントにして伊能図の展示ができるといいなと思い、いろんな方にお話ししていたら、日本ウォーキング協会の方が興味を持たれ、大阪の会員の方々が準備を始めて下さいました。一方、最初に触れたように、8月は「道路ふれあい月間」で、国土交通省の国道事務所は毎年これにちなんだ行事を催している事などから、近畿地方整備局等との連携が成立したように、冒頭のイベントが開催される運びになったわけです。

伊能忠敬の測量日記によれば、1805年8月17日（現在歴では、9月9日）に、朝7時頃岸和田を立ち、午後2時頃堺に到着したようです。夜、堺の目抜き通りになっている大小路（おうじょうじ）付近で天測を行っています。翌日は、堺を出立し大阪へ向かっています。

今回のウォーキングは、9時半に堺の浜寺公園を出て、大鳥大社を経て、熊野古道を通り、仁徳天皇陵などの集まった百舌鳥古墳群を横に見ながら、ウォーキング協会選定の「歩きたくなる道50選」に選ばれた道や与謝野晶子生家跡のある道も通ったのち、伊能忠敬が天測を行った先の大小路を経て、国土地理院の一等三角点のある「山？」としては一番低い標高（6.8m）の蘇鉄山がある大浜公園をゴールとする、3時間弱12kmの良いコースでした。

午後は、ゴールの近くのホテルで、シンポジウムが行われ、堺のま



ちとみちについて、楽しい議論が行われました。パネルの中に、自転車博物館サイクルセンターの事務局長という方がおられ、お話から、シマノという自転車メーカーは堺が本拠地であることを知りました。そういう意味でも、改めて、堺は道に関連したイベントにふさわしい所だったのだなと思いました。

シンポジウムの最後に、司会者がフロアからの発言を求めましたら、すぐさま、男性の方が、伊能忠敬が大小路のあたりからいろいろな方位を視準観測していることや、対馬から朝鮮半島を観測して国際的な関心もあつたことなどを、蕩々と述べられたので、驚きました。なお、シンポジウム会場のロビーでは、近畿地方測量部で伊能大図の展示を行い、参加した方に伊能図を楽しんでいただくことができたのですが、後で聞いたところでは、会場で発言された方は、伊能大図の展示のところで、伊能忠敬研究会の会員の方と話が弾んでおられたとのことですので、今回のイベントで伊能忠敬研究会の関西の会員が少なくもお一人増え、伊能忠敬研究会の活動が益々盛んになるのではないかなどと、余計なことまで考えた次第です。

私は、かねがね、「伊能忠敬はハブ人間である」と言っています。ハブとは、自転車の車軸のスポークが集まるところを言います。まさに、全国にいらつしやる様々な立場の多数のファンを、自転車のまわりでつなぎ合わせるという、偉人の力を実感した一日でした。

(やぐち あきら・国土地理院長)



開会式 スタート地点(浜寺公園)  
(北側国土交通大臣 挨拶)



ウォーキング風景



伊能忠敬 天測地点



ウォーキングゴール地点(大浜公園)

国土地理院ホームページから

## 伊能小図を訪ねて

星 埜 由 尚

この7月にイギリスのサザンプトンで「Caimbridge Conference : The Exchange」と称する会議があり、これに出席し、その帰りにグリニッチの国立海事博物館 (National Maritime Museum) に立ち寄り伊能小図 (イギリス小図と略称する) を閲覧してきた。

周知のようにイギリス小図は、徳川幕府が、イギリス海軍が行おうとした日本沿岸測量を阻止するため、イギリス海軍に手交したもので、現在国立海事博物館に収蔵されているものである。これまでに渡辺一郎名誉代表を始め、何人かの方々が閲覧されている。また、平成10年に江戸東京博物館で開催された「伊能忠敬展」においても里帰りして展示されている。

この度は、この伊能小図を間近に見ることができたわけだが、そのことを述べる前に、今回の会議出席と旅行の顛末についてご紹介したい。

今回の会議は、イギリスの国土地理院に当たる Ordnance Survey が主催するケンブリッジ会議 (Caimbridge Conference) の中間会議である。ケンブリッジ会議は、いわば世界国土地理院長会議とも言うべき会議であり、ケンブリッジ大学で開催されることが会議の名称の由来となっており、もともと英連邦諸国の会議であったものが1995年から世界に広げられたものである。測量・地図に関して様々な課題についての情報交換や意見交換が行われるが、最近では、国家測量・

地図機関の将来像が大きな関心事になっている。会議は4年ごとに行われ、一昨年の第3回会議において、中間年での情報交換の必要性が提案され今年の7月にサザンプトンの Ordnance Survey において「Caimbridge Conference : The Exchange」が開催された。この会議は、本来国土地理院長が出席する会議であるが、生憎国土地理院長が諸般の事情で出席することができないため、第3回の会議に出席し、OBでもある私が要請され出席したものである。

Ordnance Survey の講堂で行われた開会式には、エドワード王子が出席し、挨拶された。開会式終了後コーヒープレイクの間に出席者の中を廻られ、私もご挨拶する機会を得た。王子とともに会議出席者の集合写真を撮影した後、王子は自ら車を運転して帰って行かれた。護衛車がついていたのはもちろんであるが、開かれた王室であるとの印象を強く持った。

さて、本題のイギリス小図であるが、国立海事博物館はグリニッチにあり、グリニッチは、ロンドン中心部から鉄道で20分ばかりの、東京で言えば、武蔵野、三鷹といったところであろうか。テームズ河畔にあり、船で行くこともできる。国立海事博物館は、グリニッチの中心部に位置しており、背後の丘の上には天文台があり、現在は博物館としてグリニッチの子午線を観光客がまたぐことができる。

イギリス小図は、国立海事博物館に展示されているわけではなく、私が訪れたときは、歩いて5分程度のところにある民家風の倉庫に保管してあった。私が訪ねた Brian Thynne 氏に案内されその倉庫で小図3冊を見せていただいた。これまでもイギリス小図は渡辺一郎氏の著書による紹介や複製印刷したものがあるが、やはり実物は実物の持つ迫力があつた。一覽して気がついた点を述べると、

(1)地名等についてアルファベットが追記されている。

国名はすべてアルファベットが付記されている。海岸部の集落名、岬名などには英語で追記されているものがあり、目標となる山などの名称もアルファベットが付記されている。中には、烏海山をTORUMITYAMAなど読みを間違えたものも見られた。八甲田山は、YAKOTAYAMAと書いてある。対馬海峡などは、伊能図には表記されていないが、WEST KOREA STRAIT EAST KOREA STRAITなどイギリスの呼び方で補っている。アルファベットは清書されているが、下書きと見られるような鉛筆書き(?)も見られた。

(2)赤と青の経線の追記がある。

北海道の図には、イギリス海軍の測量成果によると思われる経線の追記が赤と青の線で見られる。経度数値の記載はない。

(3)海岸線を赤く太い線でなぞっている。

すべての海岸線ではないが、本州、四国、九州の大部分の海岸線を赤線で太くなぞった形跡が見られる。これは海岸線を見やすくしたものと思われるが、幕府軍艦方によるものか、イギリス海軍が行ったものか判断できない。他の伊能図とは異なっている。

(4)方眼線が引かれている。

米国の議会図書館で発見された大図模写図は、陸軍の測量機関において方眼線を引いているが、同じようにイギリス小図においても伊勢湾から東京湾、北海道などにイギリス海軍が加えた細かい方眼線が引かれている。

(5)イギリス側の受け入れのスタンプが各図幅に押印されている。

それによると1864年4月11日と読める。HYDROGRAPHIC OFFICEとあるのでイギリス海軍のアクテオン号ワード中佐に譲渡された後、海軍水路局に納められた日を指すのであろう。

(6)なお、イギリス小図には、針穴はない。

(7)また、虫食いなどはなく、保存状況はかなり良い。

閲覧の際、写真撮影の許可を求めたところ、全体は撮らないで欲しいが、部分ばかり撮らないとのことであつたので、要所を撮影した。しかし、なにぶんにも素人写真であり、撮影角度も斜めになるため、良い写真を撮ることはできなかった。

渡辺一郎氏の編著によるイギリス小図複製印刷物(日本古地図学会発行「英国にあつた伊能忠敬の日本全図」)があるが、残念ながら縮小されているため細かい読図には困難がある。原寸大の複製をいずれ作成したいものである。

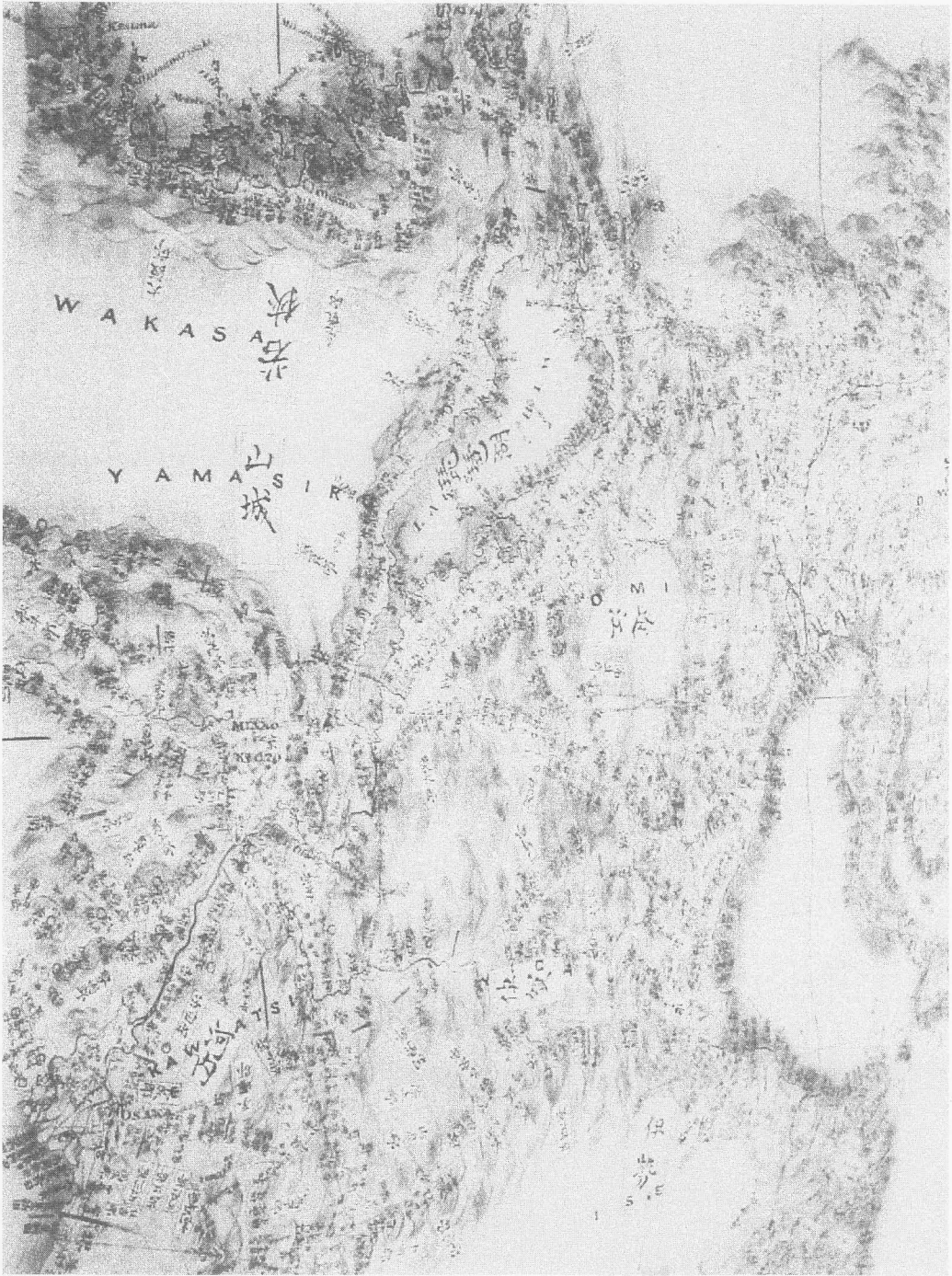
イギリス海軍は、この小図を手に入れ、アルファベット表記など手を加え、作業を行ったものと見られるが、写しを作ることをしなかつたのであろうか。当時でもおそらく苦労して幕府から手に入れたものであり、唯一のものであるから極めて貴重なものであるとの認識は持っていたであろうと推測される。従つて、当然イギリス海軍の手で写しを作成したのではないだろうか。忠実に写されていないかも知れないが、英語版の伊能図が存在するかも知れない。イギリス小図の実物を見てそのようなことを考えたが、いかがなものであろうか。

(ほしの よしひさ・代表理事、元国土地理院長)

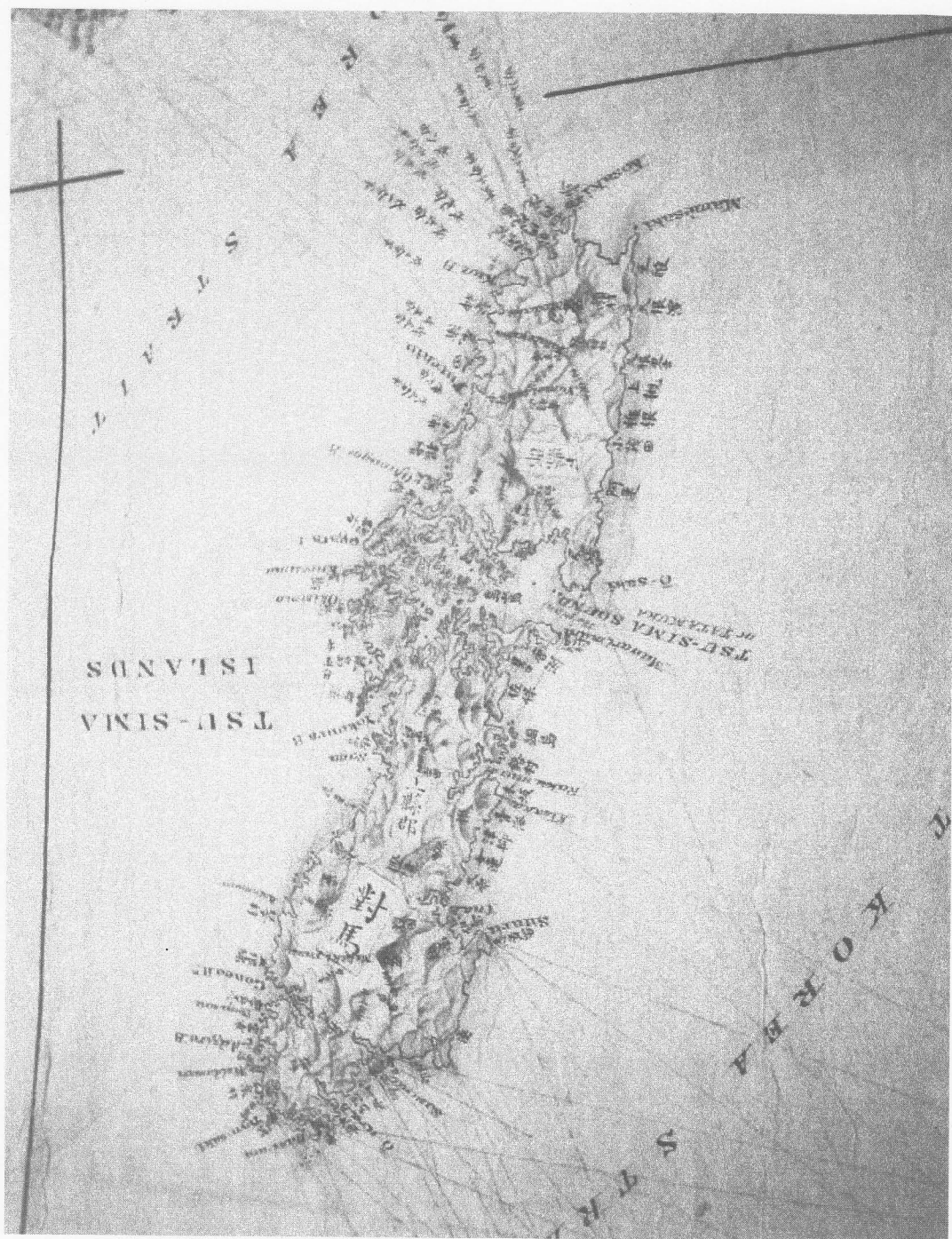




英国海事博物館藏 伊能小図・中部近畿付近



英国海事博物館藏 伊能小図・対馬付近



伊能図を世界に紹介した博物館業のゼネコン?

## フォン・シーボルトの足跡を尋ねる

渡辺 一郎

今年はドイツ、イギリス、デンマークに夫婦でしばらく滞在するので、この機会にと思って、伊能図と非常に因縁の深いフリッツ・フランツ・フォン・シーボルトの足跡を尋ねることを思い立った。まず、ライデン大学日本語科の主任教授ポート先生にメールを送って、訪問と見学をお願いしたところ快諾をいただいた。これに力を得てシーボルトゆかりの各地を訪ね、色々知識を得ることができた。

**ビュルツブルグのシーボルト記念館** シーボルトは一七九六年ドイツのビュルツブルグで生まれた。父はビュルツブルグ大学の医学部教授であった。祖父も同大学の医学部教授だったから引き立てもあったらしく、父は若くして教授になっている。しかし、三一歳のとき死去したので、業績というようなのは伝えられていない。また、自宅は賃借だったらしく、住んでいた場所が特定されていないから、シーボルトの出生場所はわからない。

私共は六月二〇日にフランクフルト空港に着いたが、翌日からすぐ難物の、シーボルトの子孫が所有するブランデンシュタイン城へ出かける気にはなれなかったので、あまり期待しないまま、ビュルツブルグに出かけることにした。

フランクフルト中央駅から区間急行で約二時間。一等車はガラガラだった。ビュルツブルグ駅前は各国からの観光客でざわついていたが、

日本人は余り見かけなかった。人の流れについてマルクト広場へ向かう。ドイツの都市は大体、教会が中心にあつて、その近くにマーケットが開かれる広場があり、マルクト広場と呼ばれる。途中にインフォメーションセンターがあつたので、案内図を貰い、シーボルト記念館への道順を聞く。

マルクト広場では種々雑多な品物を売っていたが、ホワイト・アスパラガスが目立った。この辺はアスパラガスの産地らしい。一番上等な生アスパラを五〇〇グラム買ったが二〇〇円位だった。日本では考えられない安さである。

道端まではみ出しているカフェの軒先でビールをとって昼食。大聖堂見物のあと、繁華街を少し外れた、レジデンツ（王宮）に近い場所にあるシーボルトの胸像を見に行く。軍服を着た晩年の胸像であるが、カメラを忘れてしまったので紹介はできない。そのために造つたらしい小園地の中央にあつた。シーボルトは有名人なのだなと思う。

大聖堂からシーボルト記念館には、四番の路面電車で行くことができる。駅からなら二番である。街から離れた終点一つ手前の駅で下車する。車内で「次はシーボルト記念館です」と日本語案内があつた。

記念館は門構えのある大きな敷地の中の独立した三階建ての一棟だった。入り口に日本語で看板がある。二階にわたる展示は肖像、複製写真、彼が使った医療器具（実物）、書簡などだった。所蔵資料は約六〇〇点、長崎の風景、人形など、日本文化を紹介する展示も多い。地下には茶室があるという。

ちょうどドイツのテレビが撮影中だったが、テレビ放映も結構多いという。博物館を運営するシーボルト協会の理事長クライン・ラグナウオルフガング氏がインタビュにに応じていたので挨拶をする。

「伊能忠敬」について調べており、何か面白いものがないかとやつ



てきた。シーボルトの御子孫が所有するブランデンシュタイン城にも行きたいのだが、もし、ご存じなら紹介して欲しいとお願いしてみた。しかし「ブランデンシュタイン氏は忙しい人です」と断られる。仕方がないだろう。いきなり言われては、よっぽど親しくない限り、断られて当然である。

珍しい品も見つからず、紹介も断られて、ここではあまり成果がなかったが、帰途に意外な方との出会いがあった。展示を見ている最中に「日本人がいるな」とは思ったが、こちらから、話しかける気はなかった。

ところが、停留所で「日本からですか」と話かけられたのである。

この方は、浜松医科大学臨床助教授で、静岡県西部浜松医療センター外科科長の西脇さんだった。五〇歳ほどとお見受けしたが、大変多忙



シーボルト記念館

のなか、やつと無理算段して九日間の休みを捻出し、ミュンヘンの学会へ出席し講演するためにやってきたとのこと。

シーボルトに医学の先輩として関心を持ち、記念館に行ってみようと思つて、昨夜ビュルツブルグに着いた。今晚はローデンブルグに泊まり、明日、ミュンヘンとか。専門は胃腸外科で、癌の手術をパンバンやつているとのお話だった。

働き盛りで超多忙な方が、わざわざシーボルト記念館を訪問されることに深く感心した。シーボルトは、医師の流れの中でどう評価されているのですかと聞くと、本流ではないが、西洋医学を日本に紹介した人々のなかで重視されている、とのことだった。

伊能のイベントを企画しているという「伊能忠敬のことは承知している、名古屋ドームでおこなった伊能大図全国展示のことも知っていた。行きたかったが都合がつかなかった」とか。もし再び開催できるならぜひ見に行きたいとのこと。思わず異国で知己にあつた感を深くした。

私が、三五日間の予定でヨーロッパ各地を歩いているというと「それはすごい。すばらしいことだ。私も将来ぜひそうになりたい」とのお話。自分の病気のことも少し話をしたが、私の直感では、現場の第一線を率いる素晴らしい医師と感じた。ほんとうに思いがけない出会いだった。旅の面白さである。

**ブランデンシュタイン城** この城はシーボルトの子孫、コンスタンティン・フォン・シーボルト伯爵の所有で、城の中にシーボルト記念室があると思つて尋ねることにしたもの。フランクフルトから東の方に約一時間急行列車にのると、ヘッセン州のシュルヒテルンという人口四〇〇〇人くらいの小さな町に着く。お城は、ここから直線距離約五\*

離れたエルム村にある。なぜシーボルトの子孫が城主かということである。

シーボルトの末娘（次女）マチルデ・アポロニアは、グスタフ・フォン・ブランデンシュタインと結婚した。夫は陸軍将校で退役のときは歩兵師団を率いる陸軍大將だった。退役後、出身地のブランデンシュタインとは三〇〇<sup>+</sup>も離れているが、自分の出身地と同じ名前のブランデンシュタイン城が気に入って購入し、以後子孫が継承している。現在の当主は、フリップ・フランツ・フォン・シーボルト（以下、単にシーボルトという）から四代目に当たる。経営コンサルタント、マルタ騎士団社会奉仕団ドイツ支部会長として多忙という。

そのせいか、メールで見学をお願いしたが、返事はいただけなかった。出発ぎりぎりまで待つて、もし返事があつたら通訳を雇って訪問しようと考えていたが駄目だった。それなら、アポ無しで押しかけようと決め、伯爵に送ったメールの写し、アメリカ大図展図録などを用意して出かけたのである。

フランクフルトの駅のインフォメーションで聞いたが、この城への行き方は分からなかった。列車だけ確認して駅までは到着したが、そこから先の足が見当たらぬ。駅前待っていたバスに聞いたが、これは行かない。隣に来るバスに乗れという。不確かな話だった。

そのうち、車を持っているが迎えてもなく、タクシーでもない人に気がついて、城まで運んでくれないかと地図を見せて交渉した。交渉成立、城門まで送ってもらえた。お礼として二〇ユーロ払う。

城は山頂にあつて、一帯はレジャーランドらしい。眺めはよくて、周囲の村々は一望できる。

城門脇のインターフォンを押して見学を申し込む。しばらくして、

門を開け、女性が胡散くさそうな顔をして現れた。来意を話し、城主の伯爵にあてた英文のメールとアメリカ大図の図録を渡して待つ。

今度は女性の主人とおぼしき番人風の作業着の男性が登場する。この方は *Uwe Kerschmann* 氏だった。同じことを話してお願ひする。「*Me* ブランデンシュタインは不在だ。明朝ここに来る」という。資料を見せていただけるようお願いすると、伯爵が来てからだとのこと。それでは *Museum* だけでも見せて欲しいと頼む。だんだん分かつてきたらしく、城内の記念室に案内された。記念室は一つだが綺麗に飾つてある。しかし、資料的には目ぼしいものは何もない。

まあ、掛けて下さいと椅子を薦められ休んでいると、資料箱をこそぞそやっていたが、のぞくと植物の写生画だった。写真を撮らせてもらう。地図はないかというのと、二、三枚見せてくれた。撮らせていただいているところへ呼び出しの電話。

予約した来客らしい。お好きなように見て下さい。写真もOKといつて部屋を出てゆかれた。これはまことに都合良かった。

一番見たかったのは秦新二『文政十一年のスパイ合戦』にあるシーボルトが一晚で写して持ち帰ったという地図だった。すぐ見つかったのだ、詳しく眺める。薄紙に手書きで写した精細なもの。シーボルトは地図職人でもあったらしい。

だが本図では房総半島や下北半島の形状が全く違っていた。シーボルト日本図の原図ではない。刊行されたシーボルト日本図は、伊能小図くらの元図がないとは作れそうもないと思うが、シーボルトが急いで写して持ち出したといわれるオリジナル写図は依然として闇のなかである。

その他では、一八五八年のカラフトの印刷図、一八五一年の九州の



ブランデンシュタイン城内

印刷図が良かった。模写図も多数あった。ビュルツブルグでは、いいものは依然、ブランデンシュタインにあると聞かされてきたが、どうもそんなことはなさそうである。Uwe Kertschmann氏は、お金の関係からコレクションは、ほとんど手放してたいしたものはないと言っていたが、本当にそうかも知れない。

帰りは散歩を楽しみながら歩いていたら、お城にパーティーの打ち合わせにきていたロータリークラブ役員の方が、わざわざ車を止めて駅まで送っていただいた。城で私たちの話を聞いてきたらしい。駅では時刻表を調べ、ホームも教えていただいた。お金を渡す人ではないので、名刺を出してお礼を申し上げた。かくて、アボナしの押しかけ訪問でありながら、人々の善意に助けられ一番難物の調査を終えることができてホットした。これも忠敬さんの人徳であろう。

ミュンヘンのシーボルト墓地 六月二五日はミュンヘンを訪問した。シーボルトの墓はミュンヘンにあるとガイドブックにあるので、すぐ分かると思って出かけたがこれが大変だった。シティホールの案内所で聞いたが分からない。シーボルトの絵葉書を出して頼んだら、難しいリクエストに興味を感じたらしく、多数並んでいるお客さんを、そのままにして、学芸関係者に聞きにいつてくれた。

厚いブックをもって帰ってきて、地図上でSudlicherと書いてある墓地に印をつけ、三三の一三の五号と教えてくれた。これでよし。厚く札をいって、タクシーに乗る。

ここだといわれて降りて、番地を探したら、案内板があつてシーボルトの名前があり、位置も掲示してあるが、墓域全体に柵があつて中に入れなかった。どうしたことかと墓域の外周通路を回ったが、内部は草が伸び、手入れが行き届かない状態でどうにもならない。この道



の先を右に曲がったところにあるという位置から引き返した。したがって写真は無い。もしお持ちの方はコピーの提供をお願いしたい。

墓の手入れをキチンとする人が減り、浮浪者など入り込むと困るということであろうか。ドイツ人らしからぬやり方だと、ビックリした。

ミュンヘンのバイエルン州立博物館 ミュンヘンの歴史民族博物館にもシーボルトコレクションがあるというので、尋ねてみたが、そういう名の博物館は無かった。そしてバイエルン州立博物館にシーボルトコレクションがあることが分かった。すごい建物である。聞いて見ると一部展示中というので早速観覧したが、チャイナの文物ばかりだった。全部では数千点あるが日本の地図はないらしい。オランダ国内にあるシーボルトの地図関係は立派な目録があつて国会図書館でも閲覧できるが、この売店にはコレクションのリストも無かった。

ライデン大学図書館 シュタットガルト、バーデンバーデンなどで数日を過ごし、六月三〇日ライデン大学を訪問した。前日二九日にデンハーグについて宿をとり、電車でライデンに移動して、地図を見ながら大学に向かって散策する。綺麗な町のなか、運河、ボート、跳ね橋をみながら、一五分くらい歩いて大学ゾーンに着いた。

ところが、この大学はキャンパスという一廓がなくて、町のなかに大学の建物が混在しているという感じである。住宅棟と大学棟の区別が付き難い。帰国後日本で研究滞在中の日本語科主任教授のボートさんにお会いして聞いたところ、ここには元兵営があつた。大学を作るとき、兵営のような閉ざされた一廓にはしないということを、市と約束したのだという。

三〇日、約束の一〇時に日本文化と日本語科の入り口でうろうろし

ていると、日本語科司書のワイスマンさんに声をかけられる。ボートさんの紹介で見学をアレンジしていただいている方である。これも丁度いい出会いであつた。

大学図書館に案内され、東洋資料の責任者 Jan Just Wilkam 教授に紹介される。趣旨を話し挨拶してから、登録料五ユーロ払って閲覧を始める。一度の貸し出しは三点まで。室内は静かで人は少ない。それぞれに資料を積んで研究作業をおこなっていた。

ここで手にとって眺めさせていただいた資料名を掲げておく。いずれも再度「伊能展」にかかわる機会があるならば、ぜひ招聘したい地図である。

① 黒竜江中之洲並天度 請求番号 UB二二五

以前に一度、東博でも公開されたことがある間宮林蔵の綺麗な樺太図である。図の西北隅に「間宮氏之所筆左精好可称矣 最上徳内」と記し押印する。間宮林蔵所筆の証明であろう。その上にシーボルト筆といわれる付箋がある。

以下の図は、五部でワンセットの北海道、樺太図である。

② 蝦夷西南之地 請求番号 UB二〇五(A)

蝦夷地(北海道)南部の図。地名は詳しいが、札幌から勇払に至る大横切り測線は貫通していない。

③ 蝦夷東北之地 請求番号 UB二〇五(B)

ニシベツ、クナシリ方面の図。エトロフ島の形が悪い。

④ 蝦夷西北之地 請求番号 UB二〇五(C)

稚内方面。利尻、奥尻が描かれているが、間宮はここには行っていない。

大学近くの風車



⑤蝦夷北 南部 請求番号 UB二〇五(D)

樺太を北蝦夷とよんだ。所々に方位線がある。

⑥蝦夷北 北部 請求番号 UB二〇五(E)

黒竜江の河岸が大変詳しい。朱の書き込みあり、間宮林蔵の図か。⑤⑥は筆跡が共通する。

ライデン大学日本語科 ワイスマンさんに「掌中時辰儀示蒙 求己堂主人 高橋景保」という小さな折本を見せていただく(七五×一八五<sup>ミ</sup> 一六枚)。内容は、日本の時間と西洋の時間の換算表などを収めた表で初見。こういう資料のことは知らなかった。多分、日本には無いだろう。圭表儀のミニチュアの絵も載せてある。

ワイスマンさんの話 司書のワイスマンさんには食事中や歩きながら色々なお話を伺った。日本語科の教員は二名(来年からは八名)。他に司書二名(日本語ワイスマンさん一名、韓国語一名)秘書一名。学生は約二百名入ってくるが、学部三年、マスター二年を含めて卒業する者は約半分。あとは途中で落伍するという。試験は厳しく、日本のように大学は楽園ではない。

入学者は日本に何等かの興味を感じて入ってくるが、キツカケはアニメが多いとのこと。この件については、ポルト教授と話したときも話題になったが、教授は日本の武道も挙げていた。

アニメ、武道と意外なものに関心を持たれているが、お茶や活花のような日本独特の文化に関心を持つ人も多いという。ただし、卒業生で日本関係に就職する人は少ないそうである。

ついであるが、ポルト教授に日本語科を持つ大学がヨーロッパにどのくらいあるか聞いてみたが、フランスには五つ、ドイツには駅弁

の数ほどあるそうである。外国で日本文化と日本語を学ぶ人が意外に多いのに驚く。

シーボルトは、日本学の第一人者として、ライデン大学日本語科の創設にあたり、初代教授になりたかったがなれなかった。初代教授にはホフマンというシーボルトの助手を務めた方が就任した。音楽家から転向した人で、日本には一度も来たことがないが、ドイツなまりの強いシーボルトより日本語がうまかった。

シーボルトはドイツ人であり、妻もドイツ人だった。政府と激しく交渉したこともあり、オランダ人には嫌われていたらしい。

ライデンのシーボルトハウス シーボルトが住んだことがある運河沿いの家がシーボルトハウスになっている。他人の所有となっていたが、シーボルト財団が買い戻して記念館にした。シーボルトは最初の収集品を持ち帰って、この家を博物館にして展示したが、余りに狭すぎたので政府に博物館を作るよう交渉を始めた。現在の記念館にはたいした収蔵品は無くても借り集め品が多いという。

国立歴史民族博物館 ライデン駅から歩いて五分のところに国立歴史民族博物館がある。ここはシーボルトの収集品を展示するため、当初シーボルト博物館として開館した。初代館長はシーボルトである。

学芸員のケン・ホスさんが大変多忙な中を逢ってくれた。長崎の博物館から学芸員の方が二人打ち合わせに来ており、このお客さんとマルチ処理だった。

地図目録から拾い、目当てにした地図二点は、一点は木版、一点は新潟の村絵図で期待に反したが、博物館を見学し、学芸員さんと知り合いになったのは大変よかった。

収蔵品は八万点で、うち江戸期の日本の文物が八〇〇〇点（シーボルト持参の五〇〇〇点を含む）である。彼の収集品によって日本博物館が出来上がり、歴史民族博物館へと発展した。収蔵品は政府に売却されたもので、その交渉は相当もめたらしい。政府の資金で収集したものを持ち帰って、こんどは文化財として売却しようというのだから、もめて当然だったろう。

シーボルトは始めから博物館を作るつもりで収集しており、帰国してから各地で展覧会を開き、好評を博してから売却を交渉したという。見方を変えれば、すばらしいイベント屋さんだった。そのため、オランダのライデン大学と歴史民族博物館のほか、ドイツのミュンヘン、オーストリアのウィーンの博物館にも収蔵品が収蔵されている。

いいものは、ほとんどオランダにあり、国外のものは第二回の来日の際とか、日本に住んだ息子の収集品が多いといわれている。そういうことから、出生地のビュルツブルグでも記念館を創設することになったのであろう。

ケン・ホスさんは貫禄のある学芸員さんで、日本語がすごく流暢な方だった。アクセント、ニュアンスが日本人と変わらない。あとで聞いた話であるが、お母さんは日本人ということだった。日本関係の仕事が多くて、年に一度くらいは日本に行くとのこと。前回、日本にいたとき、たまたま東博の伊能展があつて伊能大図フロア展を見た。あれは面白い試みだった、というお話だった。

それは、われわれの仕掛けだったということから親近感が増して、何でもメールで聞いて下さいということになり、別れには、わざわざ正門まで送っていただいた。

ライデン大学付属植物園 歴史民族博のあと、大学本部裏手の植物園



に行つて見る。ここはシーボルトが持ち帰った植物を育てた植物園である。大学の付属というから、東大の小石川植物園を連想してしまうが、実態は恐ろしく規模雄大な、手入れの行き届いた植物園だった。例えば、シダ類の温室なのだが、それだけでも一〇室以上あるように、ここまで徹底しなくても、と感ずる規模だった。



ライデン大学植物園・日本庭園にて

以上ほんの一端であるが、シーボルトが西洋に対し、日本および東洋紹介に果たした役割はものすごく大きいことを感じた。日本では伊能図持ち出し事件が有名だが、ヨーロッパではさらにスケールを大きくした日本・東洋紹介の先駆者として有名な人である。

このあと、デュッセルドルフに四日、フランクフルトに二日、ロンドン七日、コペンハーゲンに七日間滞在した。もっぱら、カントリー・

サイドを歩いたが、デュッセルドルフ郊外のペンラッセ（財団の経営だが、手入れの良い広大な庭園は入場無料）、イギリスのキュー庭園（孔雀が放し飼い、日本庭園あり）、バイブリー村（コッツウエル地方、村全体が庭園の如し）がすばらしかった。

ロンドン南部のサザンブトンでは、タイタニックが船出した埠頭を散歩。航空機博物館で飛行艇の操縦席に座らせてもらった。熱心なボランティアの説明があり、元パイロットですかといわれる。確かに、日本から来て、各種飛行機を熱心に見る人はそういないだろう。

コペンでは前回の訪問時、列車ごと連絡船で運ばれたオーデンセとの間の海峡に鉄橋が完成していた。反対側、スエーデンのマルメとの間の国際海峡にも橋がかかって、デンマーク側から列車が乗り入れていた。マルメ市内は休日だったが、大聖堂の前に大きな？マークを付けたリヤカーを出し、案内パンフを一杯積んで、職員一人が応対していた。休日案内、すばらしいアイデアだ。

帰りはヨーテボリーから、ヘルシンボークまで、今も運行している連絡船に乗船してみた。大型の客船に驚いて乗船したら、内部に小型スーパがあり、人々は争って買い物をしている。国際航路だから免税で安いのである。また、大型レストランもあったが、これも安い。満席で対岸についても悠然と食事をしている。外国扱いの洋上で一往復半して、ゆつくり食事するらしい。あきれた話だが、船側がよければ問題はあまい。

旅をして、あすこもこも暮らしの知恵に感心する。決めたことでも様子が変わったら変更するのが当たり前である。日本はどうして一度決めると、矛盾が噴出してもかえないのだろうと思う。

（わたなべ いちろう・名誉代表、東京都多摩市）

## 江戸八丁堀亀島町「地図御用所」と伊能図

―地元で鈴木純子さんの講演会―

### 巻 瀧 彰

中央区八丁堀地域の歴史文化を学ぼうと、地域生涯学習ボランティア活動を続けている「中央区郷土史同好会」は、平成17年9月17日（土）午後6時半から中央区立女性センター「ブーケ21」（中央区湊）で、相模女子大学講師・伊能忠敬研究会理事の鈴木純子さんを迎えて第112回講演会が開かれました。

ことは同好会が創立10周年にあたることから特別企画として「八丁堀」にゆかりのテーマで講演会を開催しており、今回は伊能忠敬を取り上げ、「江戸八丁堀亀島町『地図御用所』と伊能図」の演題で講演がありました。

伊能忠敬と八丁堀は、晩年の居住地であり終焉の場所として、また最終全図が作製されたことでもかねてから知られていたが、今回の講演を聴講して、あらためてその偉業を再認識しました。

講演は、的確にまとめられたシラバスとプレゼンテーションソフト「パワーポイント」を使った画像映写で進められ、明快で分りやすい解説に聴き入っていました。

講演の概要は、当同好会のホームページに掲載してありますので、ここでは省略しますが、要点だけを記します。

まず、忠敬の江戸での隠居宅の解説があり、深川黒江町（現江東区門前仲町）から、文化11年（1814）に八丁堀亀島町（現中央区日本橋茅場町二丁目付近）に移転したが、なぜ八丁堀だったのか？に言及したことが、新鮮に受け止められました。

それには、「黒江町の住宅が狭くなった」（仙台藩の医師・桑原隆朝の屋敷跡が空いた）との理由からの指摘には、講演を聴いて分った成果でした。桑原は忠敬の支援者として、地図製作に関するよき理解者であり、その娘・ノブは忠敬の後妻とのことです。

またこの地は、与力・藤田六左衛門家の屋敷地で、その一部を桑原が借りていました。当時の与力・同心組屋敷地は、敷地の一部を他人に貸すことが認められていました。といって、誰でもいいかというとそうではなく、八丁堀の七不思議に「医者・儒者・犬の糞」とあるように、医者や儒者、師匠、書家、画家などの学者・文化人に貸していました。

忠敬は終始この地、八丁堀亀島辺りを移転先の候補に挙げていたそうです。そしてようやく桑原跡に居住した屋敷は、「地図御用所」としても使われた役宅でした。

地図御用所という名称記述は、古文書には見当たらないようですが、

「亀嶋御用所」の記載は測量日記にあるそうです。付近を測量した下図には亀嶋町の隣りに「伊能勘解由宅」の記載があります。

講演では、忠敬の業績の中核をなす伊能図の種類、区分、図種、測量回次・作成時期、収図などについて伊能図の例示を見ながら解説がありました。これまで漠然と鑑賞していた伊能図でしたが、その製作の経緯やしくみを知るにつけ、当時の科学的な観測・測量に裏付けられた地図であり、忠敬の超人的な知力・忍耐力・行動力にあらためて敬虔な魅力であると感化されました。

忠敬は、生涯の集大成である「大日本沿海輿地全図」の幕府上呈を見ることなくここ八丁堀亀島町で、文政元年（1818）に亡くなりましたが、最終上呈図がこの地で製作されたことに歴史的意義を深く認識していきたいところです。

住居・地図御用所が所在していた跡地には、これまで存在を表示するものが何もありませんでした。はからずも今年（2005）3月、中央区教育委員会の説明板「地図御用所跡」が設置されました。掲出場所は、中央区日本橋茅場町二丁目12番付近。東京メトロ茅場町駅1番出入口のそばです。

ここであつと江戸期の八丁堀に触れてみましょう。当時の八丁堀は、現在の八丁堀、日本橋茅場町までを含む、現地名の八丁堀より二倍以上の地域を指していました。その大半が「与力・同心組屋敷地」

で、残りを町人が住んでいました。

与力屋敷は幕府拝領地なので武家屋敷地と同様に「町名」はありません。したがって、忠敬居宅は前述のとおり与力の屋敷地内にありましたので、やはり町名はありません。そこで隣接したところが町地の亀島町なので、通称として「八丁堀亀島町」の名称を付して表記されています。「亀島」という地域名もなく、「八丁堀」だけでは漠然としていますので、「八丁堀亀島町」は伝承として分りやすい表現です。

与力・同心は町奉行所配下で与力50騎（人）と同心約250人（幕末期）が八丁堀組屋敷に住んでいて、江戸の治安・裁判・火消などを司っていました。「八丁堀の旦那」とよばれ、時代劇、時代小説に登場しているのは皆さんご存知のとおりです。

「中央区郷土史同好会」は、平成7年（1995）に設立され、八丁堀を中心に、地域住民や歴史愛好家などのボランティアで運営、活動しています。毎月第3土曜日（6月は第4土曜、12月は休会）に開催し、毎回の参加費だけで、どなたでも参加できます。ことしで創立10周年を迎えました。

同好会の案内やこれまでの講演内容は、ホームページをご覧ください。「八丁堀周辺歴史案内」もあります。

<http://homepage2.nifty.com/makibuchi-2/kyodoshi/>

（まきぶち あきら・郷土史家、八丁堀在住）



講演される鈴木純子さん 2005. 9. 17 中央区立女性センター「ブーケ21」で

中央区郷土史同好会 第112回

## 中央区郷土史同好会

中央区郷土史同好会

講演会

第112回

日 時 平成17年(2005)9月17日(土) 午後6時30分～8時  
場 所 中央区立女性センター「ブーケ21」3階  
テーマ 江戸八丁堀亀崎「地図御用所」と伊能図  
講 師 鈴木 純子 先生

すずき・じゅんこ 国立国会図書館定年退職後、市模女子大学非常勤講師、伊能忠敬研究会(理事)など。

・ 講演のあらまし

《講演会》江戸八丁堀亀崎「地図御用所」と伊能図

この同好会の14年にも掲載されているとおり、八丁堀亀崎(現在の日本橋茅場町2丁目近)は、伊能忠敬終焉の地として、また、最終上屋の伊能図作製の地として、伊能図とはかわりが深い場所です。

文化11年(1814)、深川馬江町からの移転後、忠敬の死去(文政元年(1818))を境として、『大日本列島輿地全図』完成の文政4年(1821)まで、はるかなるこの「地図御用所」で行われた作業の位置づけについて、伊能図全巻の作製の経緯や内容などを背景としながら明らかにします。



八丁堀亀崎「地図御用所」と伊能図を解説される鈴木純子さん

ホームページから





「地図御用所跡」説明板 2005. 3 中央区教育委員会設置  
中央区日本橋茅場町二丁目12番付近。新大橋通り東側  
東京メトロ「茅場町駅」1番出入口(写真左)のそば

## 地図御用所跡

所在地 中央区日本橋茅場町二丁目一二番付近

地図御用所は、実測による初めての日本全国を制作したことで知られる伊能忠敬(一七四五―一八一八)の住居に設けられていました。

伊能忠敬は、五十一歳の時に下総国佐原(現在の千葉県佐原市)から江戸深川黒江町(現在の東京都江東区)に居宅を移し、幕府天文方高橋至時の門に入って天文字を学び始めました。

寛政十二年(一八〇〇)からは本格的に日本全国の測量をはじめ、以降十七年間にわたって日本全国の沿岸を測量し、その総距離は約四万キロメートルにも及んだといわれています。

文化十一年(一八一四)、九州地方の測量から帰った忠敬は、深川黒江町から八丁堀亀島町と呼ばれていた現在地付近へ転居しました。この屋敷の敷地は百五十坪ほどでしたが、忠敬の居住地としてだけではなく、測量図を制作するための地図御用所として利用されていました。

忠敬は地図が完成する前の文政元年(一八一八)に亀島町の居宅で死去してしまいましたが、その後も忠敬の居宅は地図御用所として使用され、文政四年(一八二二)門第や天文方の下役等の手により「大日本沿海輿地全図」が完成しました。

平成十七年三月

中央区教育委員会

伊能忠敬作

## 佐原村粉名口付近実測図

佐久間 達夫

平成十七年六月十日の読売新聞千葉版に「伊能忠敬故郷を測る・江戸遊学前の腕試し」という見出しで、漢字の「乙」に似た形の地図が掲載された。

あれ、この地図、私が平成十三年の暮れに、東京の某地図出版社から「伊能家で所蔵している地図ですが、どの辺の地図か不明なので調査していただきたい」と依頼されたものと同一のものだ。どうして今頃新聞記事になったのかな」と思いながら紙面を一読してみた。それによると、日本地図センターが、伊能家所蔵の原図を借用し、パネルにしたものを国土交通省利根川下流河川事務所が譲り受けたと記してあった。

この地図は、佐原市が、「伊能忠敬生誕二六〇年記念事業」の一環として、六月十一日十二日に佐原市民体育館で、渡辺一郎伊能忠敬研究会名誉代表が、アメリカで発見した「伊能大図」とともに展示された。

別れた我が子と何年ぶりかで会ったような気持ちになり、その後、伊能忠敬旧宅に程近い「佐原町並み交流館」（平成十七年四月六日オープン）に展示されていたこの地図を写真撮影し、図中に記されている細かい文字も写し取り、縮尺千二百分の一の地図を作成してみた。

図中に「寛政六寅春引堤」と記してあるので、地図の作成時期は、伊能忠敬が隠居し、名を勘解由と改称したのが寛政六年十二月である

ので、同じ年の春であることがわかる。

測量場所は、東は、篠原村（現佐原市篠原）と佐原村の境堤から、西は、佐原村と飯島村（現佐原市飯島）の境堤まで、北は、利根川の北岸から、南は、粉名口（現国道三五六号線）までである。

測量方法は、「導線法」といって、基点をきめ、測線に沿って前方に梵天（ポール）を立て、二点間の距離と方位を測定し、それを繰り返していく方法で、忠敬は、「篠原村の境堤」を基点にして、下利根川（現利根川）を堤防沿いに「佐原入川」（延享二年作成の佐原村絵図に記述してある・現小野川）を経て、津田様御定杭迄測進し、ここから舟で向こう岸に渡り、大きく流路を北へと変えている下利根川の堤防の外側の沖積地の集落である「佐原村新田」「南和田」沿いの堤防を「牛ケ鼻」へと測進した。

この後、「牛ケ鼻」を測量し、再び、利根川の土砂が積もつてきた中洲である「粉名口」の堤鼻に行き、ここを基点として、「新堀割川」と「下利根川」の南岸を西へと測進し、飯島村境堤まで測る。

続いて、粉名口地先の「新堀割川」の北岸と、「下利根川」の南岸、それに「粉名口」を測つて測量を終わりとした。

従つて、測線上には、「西二分 四十五間」とか、「申四分 四十八間」のように、方位と距離が記載されている。しかし、下利根川、新堀割川とも、対岸までの方位は記してあるが、「距離（川幅）」は記述されていない。

なお、地名などで現在も残っているものもある。

「牛ケ鼻」は、佐原市香取に鎮座されている香取神宮が、十二年毎に展開する「神幸祭」のとき、千葉・茨城県境の船上で、鹿島神宮の出迎えをうけ、「御迎祭」を行なう場所である。（香取神宮、香取在住

## 香取禮良氏の話

「荒川」は、現在の「横利根川」で、明治二十年に測量局が作成した地図を見ると、川の入り口付近は湿地になっているので、川幅が現在より広がったように思われる。なお、寛永八年（一六三一）に開削した「荒川川」（一名房州川）は、牛ヶ鼻より横利根川を一・程北上した所にある「荒川」という集落より東へほぼ一直線に「丸江湖」の南側を経て与田浦へと繋がっていた。『部冊帳』伊能景利編纂、荒川在住栗林泰夫氏の話

「粉名口」は、現在の国道三五六号線の北に位置し、当時は、大小の沼や中洲があつたようである。明治三十三年から行なわれた利根川の改修工事によって、利根川の流路も変わり、そのうえ、川底にたまっていた土砂を使ってこの地を埋めた。現在では、佐原市役所、千葉地方事務局佐原支局、国土交通省利根川下流河川事務所などの役所や商店、住宅などが立ち並んでいる。

「水神」は、水を守る神様で、利根川付近の集落には、たくさん建立されている。「伊能忠敬実測図」にも、「佐原新田」に記述されているが、現在も、利根川下流河川事務所佐原ドックの東側の利根川の堤防の桓の太木の根元に建立されている。

石の祠には、

元治元年辰年設立 破損に付  
明治二十五年二月十五日再建す  
水神宮備社 發起人  
本宮八五郎  
奥主太兵衛  
仁井宿講中

と、刻字されている。（現在の位置が、佐原村新田に建立されていた水神の位置と同一かは不明）

伊能忠敬が実測した佐原村粉名口付近の地図（縮尺千二百分の一）と、明治二十年に陸軍参謀本部測量局が作成した地図（縮尺二万分の一）とを比較してみると、次のようになる。

測量局図	伊能図	篠原村境堤より飯島村	境堤までの直線距離
		地図上の長さ	地図上の長さ×縮尺
一三・四 cm	一二〇・五 cm		二六四六 m
			二六八〇 m

伊能忠敬が、佐原村在住時に作成したと思われる地図には、「佐原村粉名口付近図」のほか、「佐原村本宿・新宿淵岸田地匱画図」「佐原村新宿絵地図」などがある。

「佐原村本宿・新宿淵岸田地匱画図」は、忠敬が隠居し、長男景敬に家督を譲った寛政六年以前に作成したものと思われる。その依拠としては、寛政五・六年に改めた「佐原村田畑屋敷名寄小前帳」（伊能忠敬記念館蔵）に記述してある田畑屋敷の畝歩と、「佐原村本宿・新宿淵岸田地匱画図」に記されている畝歩とが、殆ど一致していることがあげられる。「佐原村新宿絵地図」は、佐原村の中央を南から北へ流れている小野川の西側に位置している新宿の絵地図で、ここに記述されている内容も「小前帳」の記述内容と、ほぼ一致している。

○佐原村田畑屋敷名寄小前帳（伊能忠敬記念館藏）  
安永七戌年改 寛延三年年水帳へ引合  
寛政五丑年十一月写之

一上田まゐり  
一上田まゐり  
一上田まゐり

・ 浜宿 木戸場藤左衛門

一、上田	一畝五歩	えげの下
一、上田	一畝一五歩	えげの下

○佐原村本宿・新宿淵岸田地龜画図

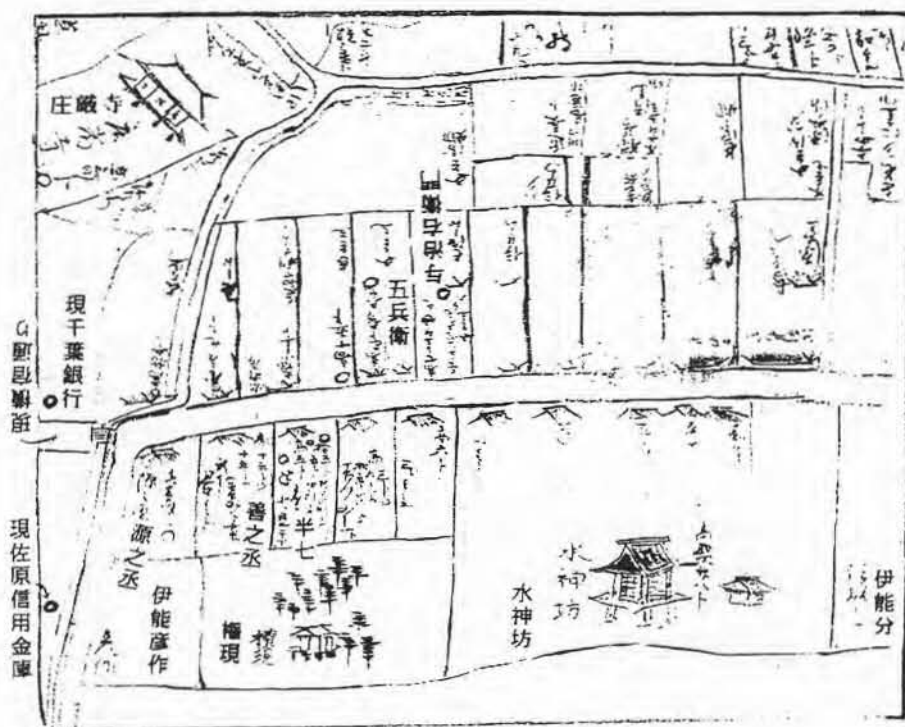
[illegible]

字関戸  
(横宿より北側)

一、屋敷	壹畝步	関戸	源之丞
一、屋敷	拾五步	新河岸	池田屋善兵衛
一、屋敷	五步	関戸	半七
一、屋敷	貳畝貳拾八步	水神坊	
一、屋敷	三步	中宿	五兵衛
一、屋敷	三畝步	庄嚴寺	
一、屋敷	七步三厘四毛	関戸	与治右衛門



○佐原村新宿絵地図（伊能家所蔵）



忠敬が、江戸へ出る前に天文曆学地圖を学んでいたことは、寛政十二年閏四月五日に蝦夷掛松平信濃守忠明へ差し上げた書き付け（蝦夷干役志啓行策略）に、

寛政七乙卯年五月、御当地へ罷出、深川黒江町に住居仕り罷有候。前々より天文曆学地圖等相学候所、六ヶ年以前高橋作左衛門儀、御用に付罷下り候節より門弟に罷成天文曆学測量出精仕候（以下略す）。

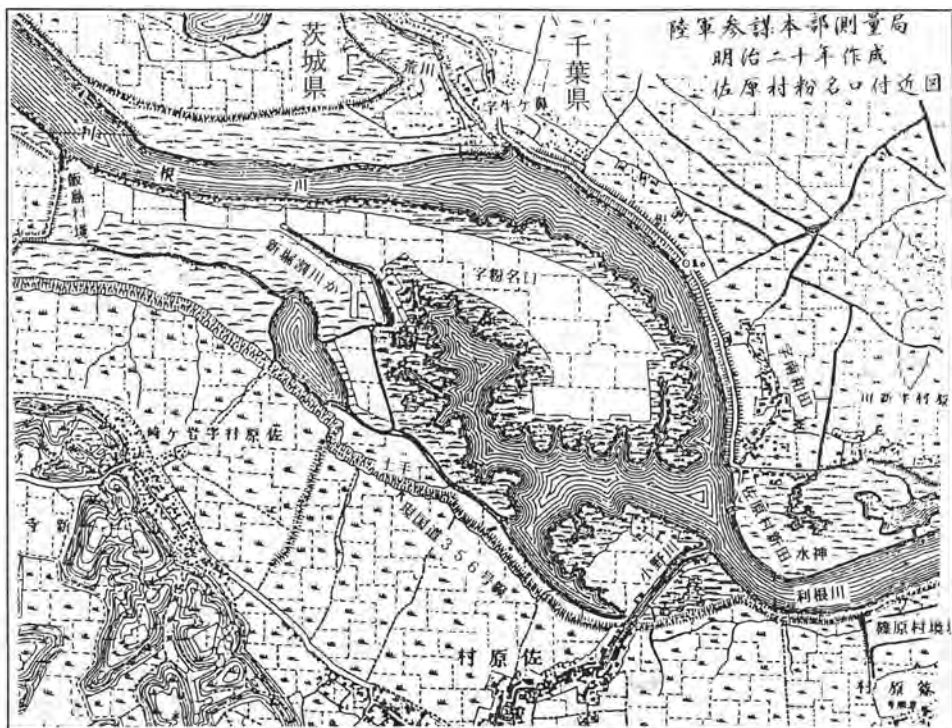
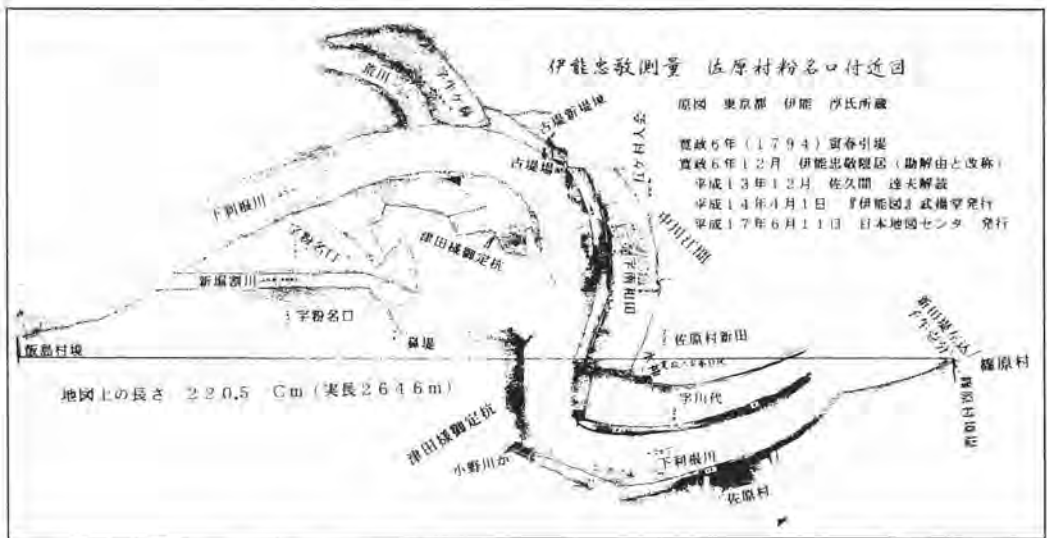
2.

また、文化元年八月に「日本東半部沿海全図」の上呈に当たって、天文方の高橋景保が記述した「序文」に、

伊能忠敬素より天文地理の学を好み、後に先人（注なき父・高橋至時）に従いて益其術を学び、寛政十二年庚申命を奉じて蝦夷地極度を測量す（以下略す）。とも記してある。

これらのことから忠敬は、佐原在住時に測量術や地図作成の知識技能をある程度身に付けていたことが推察できる。その忠敬が、当時の我が国で天文暦学の道では右に出るものがないといわれていた高橋至時の指導を受けたことによって、実測による日本地図作成という偉業を成し遂げる事が出来たのであろう。

(さくま たつお・元伊能忠敬記念館館長)



# 忠敬小倉顕彰会 第三回「伊能忠敬献花の集い」

石川 清一

伊能ウォークが九州に来る頃、地元関係者から建設の構想が持ちあがり、その後北九州市の賛同も得て、2001年9月26日に竣工以来四年になりました。埋められているタイムカプセルを開く10年後の2011年まで六年になり、役員一同この伊能顕彰事業を北九州のこの地域に定着させたいと念願しています。

9月26日、当日は晴天に恵まれ、16時30分から開始。地図の懶ゼンリン社員三名が扮した伊能忠敬と測量隊員の一行が川の向う側から、木の橋「常盤橋」を渡って、記念碑のあるこちら側の会場に向って歩いて来るシーンに、NHKはじめ地元西日本新聞ほか報道関係者のカメラの動きもあわただしく、会場到着で最高潮に達しました。

式典は、最初にこの6月急逝された今田章前会長に黙祷をささげたのち、顕彰会樋吉会長の挨拶、国土地理院九州地方測量部小原部長及び北九州市長代理から祝辞があり、末吉北九州市長、当研究会星替代表理事、伊能家七代目伊能洋一夫妻様からの祝電が披露された後、献花にうつり、出席者一同にぎにぎしく忠敬先生の記念碑に菊の花をお供えました。

続いて17時から第二部として、近くに会場を移し、地元の研究家稲津義行氏の「京町・魚町・室町―江戸時代の町人の生活」の記念講演があり、終了後第三部として懇談会の運びとなった。本年も盛会でありました。

(いしかわ せいいち・九州支部長)

日本地図

発源による日本地図を作った偉人

## 第3回 伊能忠敬 献花の集い

■平成17年9月26日(月)  
16:30~(開演後行)

■常盤橋正面  
伊能忠敬記念碑前  
(西ノ7フェリストラマヤ)

伊能忠敬記念碑の存在をPRし、観光都市北九州・小倉のまちづくりをいします。

ごあいさつ

伊能忠敬の記念碑を建てて4周年を迎えました。この記念碑が北九州市の歴史者により、本市のついでに建てられ、まわりのことを思い出し、伊能忠敬の偉業を思い出し、日本の発展に世界に誇れることに貢献することを期して、この記念碑を建て、その功を後世に伝えること。この記念碑を通じて、本市の歴史・文化・市民の発展の発展として、北九州市の活性化につながることを期待しています。

伊能忠敬の偉業をPRし、観光都市北九州・小倉のまちづくりをいします。

■式次第

16:30 開式の儀  
会務部長  
稲津義行  
祝電披露  
献花の式  
閉会の儀

17:30 記念講演会  
稲津義行氏「江戸時代の町人の生活」

17:40 懇談会  
乾杯  
献花  
閉会の儀

18:00 終了

地図を見よう! 地図を遊ぼう!

ゼンリン 地図の資料館

リバーウォーク北九州14階  
北九州市小倉北区東山1-1-1  
TEL(093)592-9082

※開催日時: 9月26日(月) 16:30~18:00  
※会場: 常盤橋正面 伊能忠敬記念碑前  
※入場料: 無料(ただし、雨天決行)

盛大に献花の集い



## 伊能忠敬図との出会い

穂吉 正明

ある学者の一節で「感動は他から強制されるものでも、命令されるものでもなく、あくまでも自分自身、つまり、いのちそのものから出て来るものです。だから感動にはうそがありません」と。私自身、感動こそ人間が生きている「あかし」だと感じる様になりました。年齢、性別などに関係なく、何かに出逢い、心ときめき、感動を覚え、又新たな出逢いに感動する。だからこそ出逢いはいつでも新鮮で、刺激的なのです。毎日異業種の人達と出逢い、感動する機会の多い現在の私は、これを嬉しく思いながら老いの小春を感じております。

今から三十数年前、測量・設計業に公務員から転じた私は異分野の人達との出逢いに恵まれるようになりました。

当時の私は、江戸時代の重臣、井伊掃部頭いゐ 掃部頭の言葉が大好きでした。それは常々の心得として語られていたもので、次のようなものです。『いかなる些事であろうとも、はたまた、いかなる時であろうとも、時・所・事を問わず、それが最後の仕事であると思つてやれば、粗略なことも出来ず、責任のもてる仕事をやることができるのだ。この心得を守つておれば、人間大丈夫なのだ』時代背景こそ変わったとはいえ、これは真理であり、自分自身の言葉に変えて言うなら「勇氣と愛」であると思うからです。

私は何事にも不器用で、仕事以外にはこれといった趣味を持たない人間でした。その為、どうしても仕事以外の人との交流が少なくなつ

てしまいがちでした。しかし、これは実に淋しく悲しい事だと思います。

人生、生きていく上で、多くの人との出会いがあります。しかし、それと同時に多くの別れもあります。

それだけに多くの人と出逢い、触れ合う機会を持つことが人生をより楽しく豊かにする一つの方法であると思います。

最近、私は多くの人に出会う機会に恵まれます。同業に限らず、又年齢性別を越えた、幅広い層の人々です。

これらの人々と語り合う事は、私にとつて自分の知らない世界に触れ合う、新鮮さに満ちあふれた機会なのです。

毎年九月に北九州市小倉北区室町紫川右岸において、伊能忠敬献花の集いが行われました。これは九州測量起点の記念として、この場所に記念碑を建立し、この場を小倉の新名所として広く親しまれる事を目的に行われた記念式典です。

伊能忠敬研究会会員である私も、当日は執行部幹事として、その準備運営に携わりました。当日は多数来賓の方々にご参列を賜りました。その中のお一人に、俳優の加藤剛氏がおられました。彼は「伊能忠敬―子午線の夢―」で主演され、二百年後の現代に忠敬を演じ、その偉業を現代に伝えた役者のお一人です。彼も又二百年の時を経た現代において、忠敬との出会いがあり、私も又この記念式典を機に、今まで全く縁のない俳優という職業の加藤氏との出会いがあったわけです。

ある作家の言葉に『その時の出逢いが、人生を根底から変えることがある。よい出逢いを』とありました。

出逢いの尊さ、重大さ、そして不思議さを静かに、しかも感慨深くかみしめて「出逢」に感動する人間でありたいと思います。 感ずべ



きもの感じない人間は、人間として失格なのではないと思います。

日々多くの出来事があり、その大小に関わらず、答えを出すのに悩み迷うのが、私達人間ではないでしょうか。それでも何らかの答えを必ず出さなければならず、容易に答えは出せないものです。

この時に必要なのが「勇気と愛」ではないかと思うのです。これは仕事に限らず日常生活においてもすべての事に共通する真理ではないでしょうか。又あらゆるものを愛する心も忘れてはならないものでしょう。愛する心というものは、人間に勇気を与えてくれるものだからです。

長く人生を生きておりますと、多くの別れに会おう機会があります。辛く悲しいものもあれば、次なる機会に結びつく為のもの、新たな旅立ちへのものなど、こういった別れのすべてが、又新しい事、あるいは物、人へつながるきっかけになる様に思います。別れとはすなわち、出会いへの始まりではないかと。

私も残りの人生において、あとどれ位多くの人物事柄との出会い、別れを経験できるのかわかりませんが、その都度新しい感動に出逢える事を楽しみに、日々精進していきたいと思うところです。

＊井伊直弼（一八一五～一八六〇）江戸幕府の大老。彦根藩主。

掃部頭と称す。

一八五八年修好通商条約（安政の五ヶ国条約）に調印し、六十年水戸、薩摩藩士に江戸城桜田門外で暗殺された。

（あきよし まさあき・前北九州GIS測量協会会長、

伊能忠敬小倉顕彰会会長）



## 詩人みたいな木

武田 威

### 私の測量体験―穴あらば―

さきの大戦中（一九四一年）私は陸軍に召集され、郷里秋田の徴兵区である青森県弘前の野砲連隊に入隊し、幹部候補生として砲兵の教育を受けた。砲兵は射撃班と観測班（指揮班）からなり、私は電気通信出身なので指揮班に編入された。前者は砲車や弾薬を、後者は観測や通信器材を扱う。

教程に「測量」という課目があつて、午前中は「三角測量」や「導線法」、図面の描き方等の講義、午後は実習である。演習場一隅の径一〇〇メートル足らずの池の周りを磁石と巻尺で測量値を記入しながら一周して出発点に戻り、その数値を図面上に表現するのである。作業の精度は図上の出発点と終着点の距離で表わされ、両点合致することが理想である。

二〇数名の候補生が三組にわかれ夫々作図した結果、誤差の最少は二三メートル、最大は七〇メートルであつた。予想を超えた大きさに「はじめてとは云え兵隊とは違うのだ。注意力が足りない」との教官のきびしい講評であつた。ふり返つて緊張感や作業に反省するところの多い演習であつた。

幹部候補生というのは大学、専門学校の卒業生で、在学中「軍事教練」（歩兵の一般訓練で義務化されていた）を受け、応召して試験に合格した者である。一定期間の教育を受けた後、将校に任命される。

法、経、文、理工学部等の外、宗教大学や美術学校の出身もあり、

理工系は別にして、計測とか製図とは縁のない者も少なくなかった。初体験とはいえ実技の難しさを現実に痛感した次第であつた。

伊能測量隊の隊員の顔ぶれを見ても訓練された熟練者ばかりでない。毎日二〇・三〇の測量行の後、三日に一夜は星の観測が行われる。重い器材の開設撤収は重労働である。毎日の測量作業の手を抜くことは許されない。この緊張を十七年間持続するのだから大変である。すぐれた指導力と個人個人の使命感が測量隊の作業規律を確立し、伊能図の精度に結集したものと思う。穴あらばである。

アメリカの資源探査衛星ランドサットが二〇〇三年に本州を撮った写真を見ると、平素見なれている形よりすこし痩せているように見える。念の為伊能図を写真と同じ大きさに縮尺して比べてみたが、ひいき目か意外によく似ているのである。牡鹿半島の先端と佐渡ヶ島の北端を結んだ距離もよく合っている。

足と磁石と物尺で描き上げた伊能図が技術の粋を集めたランドサットと肩をならべるとは見事と云うほかはない。我々の間違いだらけの測量演習を想い出し、改めて伊能図の出来栄えに感嘆したのであつた。

### 交會法異聞

一九四三年正月、私は砲兵隊から陸軍航空路保安部隊（通称風部隊）に転属し、台中通信所（台湾）勤務となつた。部隊は内外の主要飛行場に通信所を開設していて、去来する飛行機に気象、飛行場の状況、敵情等の保安情報を提供する外、雲にまかれて自分の位置を見失った機に「交會法」という測定方法でその位置を知らせ安全に誘導する救難活動も任務の一つであつた。

台湾と沖縄の間には初夏から秋にかけ厚く高い雲の壁が立ちふさが  
る。所謂台湾坊主である。うっかりこの壁につっこむものすこい上  
昇気流にふり廻される。雲の切れ間を探して出たり戻ったりしている  
うちに熟練した操縦士でも自分の位置が判らなくなることがあるとい  
う。

私もこわい経験がある。本部への連絡の為便乗した双発練習機がこ  
の上昇気流に巻き込まれたのである。激しい動揺で機体がミシミシき  
しみだしたかと思うと、急にむせる程埃が舞上ってくる。しばしの難  
飛行の後、雲の切れ間をぬって無事着陸したのであるが、操縦士に尋  
ねたところ「あおられて裏返しになった」という。埃は舞上ったので  
はなく、天井になった床から降ってきたのであった。この空域はベテ  
ランも手を焼く難所と云われていた。

赴任して間もなくの頃、若い通信手の乗った輸送機が沖縄へ向って  
飛立って行ったが、二時間程してこの機から「位置知らせ」の緊急無  
線が飛込んだ。続いて「太平洋か日本海か不明」と来たものであ  
る。私達は「ほんとかね？こんなことあるかね！」と云いながら、  
急遽「上海」と「各務原」（岐阜）の兄弟通信所を呼出し「交会法」に  
よる位置測定の手続きをする。動く目標であるから三通信所が同一瞬間  
に測定しなければならない。準備のとのつた所で

1 飛行機に数秒の連続音を数回発信させる。

2 各通信所の方向探知器は迅速に電波の飛来する方位角を  
測定し、統制通信所（台中）に通報する。

3 統制通信所は地図上に三本の方位線を交会させ、目標の  
位置を決定し、迷子機に知らせる。

という手順で作業は進められる。

幸いにこの輸送機は大大大廻りをしながら  
も無事那覇飛行場に着陸した旨の連絡があり、  
我々も一息ついたのであった。

下・双発練習機キ-54

よく連絡用に便乗しました。

私達が六〇年前に活用した「交会法」と二  
〇〇年前の忠敬測量隊の「交会法」とは、目  
標への方位線が収斂するか発散するかのちがい  
だけで理屈は全く同じである。時間を超越し  
た連帯感を覚えずにはおられない。

三通信所から地図上に引いた三本の方位線  
は一点に収斂しないで一辺が三〇〜四〇\*程  
の三角形になる。之は目標が動くことによる  
ブレ丈でなく、メルカトル地図上に直線を  
引く為に生ずる歪みによるようだ。地域が広  
くなり特に緯度の中が大きくなると解析はむ  
づかしい。

さわぎからひと月経って、かの輸送機の機長S大尉が燃料補給の  
合間に通信手を伴ってあいさつに見えたのには恐縮した。何しろここ  
らは新米の少尉である。その時の打明話。

「全然視界のきかない中で冗談に日本海かな、太平洋かなとつぶやい  
たのを通信手が真に受けて電信を打ってしまった。騒がせて申し訳な  
かった。しかし位置を知らせてもらって助かった。予想していたより  
八〇\*も東によっていたよ。ありがとうー」



僅かの休憩の後、機は比島に向け飛立った。離陸間際、滑走路に出て手を振り合つて無事を祈つたがふたたび帰ることはなかった。少年通信手の幼な顔が忘れられない。

### 詩人みたいな木

沖繩には悲しみの泣き声や涙で育つ木があるという。

沖繩出身の詩人山之口獺は「世はさまざま」と題した詩の一節で「詩人みたいな木」とうたっている。

そうかとおもふと琉球には

うむまあ木という木がある

木としての器量はよくないが

詩人みたいな木なんだ

いつも墓場に立っていて

そこに来て泣きくづれる

かなしい声や涙で育つという

うむまあ木という風変りな木もある

沖繩本島の南端摩文仁は、さきの大戦で米軍に追いつめられた日本軍が最後の抵抗を試み壊滅した地である。多数の市民を巻添えにした悲劇は今もきびしく語りつがれている。

九五年ここに「平和の礎」が建設された際、二四六本のこの木が植えられたという。

大戦に応召した私が所属した陸軍航空路保安部隊（通称風部隊）は、内外の飛行場に通信所を展開し、去来する飛行機に適切な保安情報（気

象、敵状等）を提供することを任務としていた。私が勤務していた台中通信所（台湾）は沖繩通信所との交信量も多く、顔見知りも大勢いて特別深い関係にあった。

沖繩戦がはじまってからは後退を重ね、最後に摩文仁の山かげに開設した通信所からの弱い電波を私達がかたづをのみながら傍受していた。

戦況が緊迫した六月中旬、

「アッ 敵兵が見えます！ 見えます！

これで通信所を閉鎖します 皆さん サヨウナラー  
サヨウナラー」

この悲痛なメッセージを最後に連絡は途絶えた。私達は涙ではるか北東の空に手を合わせたのであった。

三〇年前、生き残った隊員有志の尽力で最後の通信所跡に「風部隊之碑」が建立されたのであるが、二〇〇二年（平成一四年）秋、私はようやくこの地を訪ねることが出来た。発起人で今尚碑の守人をつとめておられる松村、





福原の両氏が初対面の私達の案内をしてくれた。嬰鑱おんけんとして居られるが既に九十才を超えたという。

三〇〇平米程の丘の中腹の平地に自然石を刻んだ「風部隊之碑」と、黒曜石の建立の由来を記した銘碑、戦没者の名碑が秋空の下に並んでいた。それを辿って友の名を見出したときのおどろき、六〇年前の想出に、まこと感無量であった。



沖縄植物図鑑によると「モモタマナ」と呼ぶこの木は沖縄方言で「ウン・マーギ」或は「クワディーサー」といい、街路樹や公園樹として植えるという。葉の写真が掲載されているが大きさの説明がないし、木の姿も判らない。

「器量はよくないが、詩人みなないな」この木に無性に惹かれた私は、福原さんに「詩」と「葉の写真」のコピーを同封して、この木の姿を

撮った絵はがきがあつたら送って頂けないかと手紙を出したのである。

投函して四日後、突然福原さんから冷凍便が届いた。開いてみると見事なマンゴーの実と一緒に大きな木の葉、数枚。

「クワディーサーの葉です。ドライブ中、後便で」と走り書きされたメモが添えてある。

「なんとまあ！」とおどろいている所に追かけるように氏からの電話が入った。沖縄からである。

「あの詩に娘達が感動して、その木を見に摩文仁にドライブしてきました。昔、土葬が行われた頃墓場の周囲に植えたそうです。木の姿の写真は後便で送ります。いい詩ですねー」

なんともありがたいことである。この気持ちどういい表わしたらよいのだろう。碑をバックに並んで撮った氏の写真に私は何ども「ありがとうございます」と呼びかけたのであった。

みたまねむる 碑いし 覆ふガジュマルの

梢うれ 蘭々りんらんと鳴る摩文仁の丘に

同行した亡妻の作である。この木のことを知ったら、もう一度行きたいと云うにちがいない。

私の戦後はようやく終わつたが、新しい沖縄がはじまりそうである。

【前文は小島民男「時の墓碑銘」より】

(たけだ たけし・元東芝、東京都小平市)



福原さんから送られた「詩人のような木」の写真。

犠牲者の名碑がはるか先まであります。



利根川素描

江口 俊子

武田さんからのお手紙です。「隣りの奥さんがインターネットでとったモモタマナの写真をもってきてくれました」と。カラーで12枚、四季のモモタマナがきれいに写っていました。

宮古島の梅本浩史さんの説明の一部です。『沖縄地方を旅すると、海岸や街路に貴重な緑陰を提供してくれる木々に出逢います。この木は落葉或いは半落葉性の高木で、枝張りがあります。葉は枝先に集まって互生し、まるで日傘のようにして日陰を作ってくれますので、大助かりです。また硬そうな種子は海水に浮遊して分布を拡げたり、食用にもなり、アーモンドに似た風味を持っています』。

編集部

生誕記念行事は楽しかったです。皆さんに目にかかれて刺激になりました。研究熱心には脱帽です。

(えぐち としこ・  
千葉県山武町)

## 井田因幡守を偲ぶ脇差

神保 誠

私の家に昔から大切に保存されてきた一本の脇差がある。白鞘は薄黒く汚れ、刀は全体に錆付いて、何年も手入れがされていなかったのを私は子供の頃覚えていた。その頃の祖母の話によると、坂田城（近隣の字坂田にある史跡）の殿様から記念に贈られたもので、外にも何本もあったが、太平洋戦争中、役場の職員が何回も来て供出をさせられ、一本だけを残してくれたとのことだった。これは戦争中に鉄不足、戦争直後は武器所持の禁止の為だったということを後になって知った。

それ以来何年もの間そのまゝの状態で保存されてきた。その間刀剣に興味を持っている友達に刀について話を聞き、わたくしも少し関心を持つようになり、刀剣の研ぎ師に研ぎ直してもらい、ついでに新しい白鞘に入れ替えてもらった。その時改めて銘を見ると「好徳之應好作之徳勝」と刻まれていた。刀剣図鑑には徳勝は水戸に住む刀鍛冶とあり、名の通った人ようだった。好徳とは一体どんな人物か解らずそれ以来不明だった。

私は数年前から古文書の学習を始めたのを機に私の家にある古文書の整理をしていると、坂田城に関する書状が沢山あり、中に井田平三郎好徳という名前をみつけた。これが昔祖母が教えてくれた坂田城の殿様のことに違いないと思い、早速関係の書物を調べた。

坂田城主井田胤徳は天正年中北条氏政の支配下にあった。天正一七



年北条氏からの小田原出陣の要請を受けて参陣したが北条陣営は滅亡、小田原城は落城した。家康の関東入りと共に、井田氏は家康の第五子武田信吉（佐倉城主）に仕官、さらに慶長年中（一五九六〜一六一四）に家康の第十一子頼房（威公）に再仕官、水戸藩士として幕末に至った。

井田家第十一代平三郎好徳は一八四四年（弘化三）父好高の逝去により三才で家督を相続、十八才で歩士目付になった。一八六四年（文化四）初代井田胤徳の三百年忌に当る年に先祖の墓参を幕府に願い出していた。そして諸侯格にて許可されると駕籠脇、側侍、若徒等総勢一八人と共に来総、坂田城跡に隣接する菩提寺に遠祖を詣でた。墓参の後旧臣であった神保忠衛門（十三代宗備、文久四没）を訪問し、旅の疲れを癒した。その時の感謝の意を込めて贈られたのが前述の脇差であった。残念ながら何時どのように贈られたかは定かでない。

一八六四年（元治元年）好徳が水戸に帰って一〇日後、武田耕雲斎を大将とする水戸天狗党の反乱があった。好徳はすでに天狗党への参

加の決心を胸に先祖三百年忌に来総したものと思われる。その時彼は井田因幡と号し、潮来勢二隊の内の正武隊の隊長として各地を転戦したが敗走した。総勢約八百人の一行の様子をある上州人が手紙に次のように知人に書き送っている。

「第一の備え、龍を描きたる旗一流、『発して節に中る、斉昭書』と鑄つけたる大砲三門、各人鎗・鉄砲など得物をたずさえ同勢百人余り。……続いて赤心の旗一流、大砲二門、この手の大将藤田小四郎、紺糸おどしの鎧、金鍬形の筋兜をせおい、黒ビロードの陣羽織……(余中略)……総勢は騎馬武者二百余人、小荷駄五十匹、大砲十五挺、歩兵教百、あわせて千余人、見る人の目を驚かざるはなし」

(「新撰組まかり通る」より)

ついに西上して一橋慶喜に訴える方針をとり、越前の敦賀に布陣した。十二月十一日、越前国新保駅に到着したが、一橋慶喜が諸藩をひきいて討伐のために来ると聞いて、十七日加賀藩に降伏した。そして敦賀の鯉倉に収容され、きわめて厳しい待遇を受けた。取調べは二十日間続き、都合三百五十三人が処刑された。

慶応元年二月、幕府はまず耕雲斎、藤田小四郎ら二十四人を処刑し、さらに三百五十余人を斬首あるいは死罪とし、百余人を遠島、軽輩百八十余人を追放した。さらに処刑は徹底して行われた。耕雲斎の妻や十歳と三歳の二子も斬罪・梟首、孫の三人も死罪に処せられ、田丸稲右衛門の母は八十二歳で、子は二歳であったが、永牢に処せられた。まことに血で血を洗う惨状であった。好徳は耕雲斎とともに自刃を許され切腹した。享年二十四歳であった。処刑場の跡に松原神社が建立され、全員の霊が祀られた。又明治元年に水戸の三夜廟に改葬された。

明治四〇年に政府は殉難の士を追賞し、好徳に正五位を贈った(殉難録稿)。

一方坂田城の旧臣の子孫、小関、寺田、萩原達(皆近隣に居住)は敦賀まで出向き、好徳の霊を迎えて地元光台寺に位牌を納めた。町内に住む郷土史家によると萩原家に敦賀までの道中日記が大切に保存されているというので、私は萩原家を訪ねて拝見させて頂いた。

この文末に箱書と位牌を転載した。



井田好徳辞世

さらに検証のため、本年元旦に水戸を訪れた。光圀公が水戸藩土のために創設した常盤共有墓地内にある井田好徳の墓石は前日の降雪で被われていた。回天神社の境内には一定の形をした天狗党烈士の墓石

が三七四基、あたかも行進しているかの様に整然と並んでいた。

それから好徳も学んだであろう水戸藩の藩校・弘道館（天保十二年第九代藩主徳川斉昭等公により創設）を見学した。尊王攘夷を旗印に天狗党の一人として戦った好徳に思いを馳せながら歴史の地水戸を後にした。

（補足）

井田好徳文書箱書（坂田・小関家文書）

旧主好徳君、幼ニテ父母ヲ失ヒ祖母ニ育テラレ、成長ニ從ヒ文武ノ道ニ達ス。身幹勇壯、御年十一歳之時ヨリ臣八郎徳怒水府ニ罷出守伝、水戸烈公斉昭卿之命ヲ以而、十八歳ヨリ御目附役ヲ奉ル。又中納言慶喜卿御上洛役ヲ御供ス。文久四甲子年水戸戦争、九月八日、湊御殿陣ヲ引払ヒ、武田伊賀守正生ヲ始大將分八人、騎上ノ士二百騎、卒千余人上京道之數戦、中仙道筋ヨリ木曾路へ至リ、江州迄昇降り有リ。越前敦賀へ抜け出シガ、加賀藩主へ落去、終ニ本意ヲ遂ス。翌年同所ニ於テ自害。

至誠院殿正典忠因大居士 神号井田威名彦命

上総國武射郡坂田領井田因幡守ヨリ十一代之胤也。

大將之内、依神号ヲ称ス。古法名ハ越前ヨリ送越シタ儘弔拜受ス。年号改元治元年、翌丑年二月四日、越前敦賀泰勝寺ニ葬ス。明治元年七月、天朝命有テ水戸三夜廟所ニ改葬ス。御差料山城大掾国重ノ刀、略御系図拝納置候也。一枚ハ御先祖代々之御尊名御法名ヲ記ス。子々孫々ニ至ル迄不可怠尊敬。

臣小関民部十代之胤

小関八郎左衛門徳怒 謹書

井田氏位牌1（寺方・光台寺旧藏）

○光台院殿天慶成運大居士

（裏） 永禄八年三月九日没

上総國武射郡坂田城主井田因幡守某

文化七年庚午十一月

後男 井由平三郎好礼

（じんぼ まこと・忠敬父神保恒貞生家第十六代）

## 伊能測量記録の発刊 三重県史資料

三重県史資料叢書2 伊能忠敬測量隊の記録

Ⅰ文化二年東紀州地域におけるⅠ

平成17年3月31日発行 編集発行 三重県

（生活部文化振興室県史編さんグループ）

千葉県の忠敬史料について県レベルでは二つ目でしょうか。うれしい話題です。この資料集には文化二年二月の「紀和町西家文書」の「測量御用留帳」と「尾鷲組大庄屋記録」から「公儀御役人衆上下老四人此度測量為御用諸国順道通行被成候二付右取扱扣・文化二年四月」など七つの文書が一〇二頁にわたり復刻されています。

三重県に「是非誌上でみなさんに公開をしたい」とお願いしたところ、有難くご了解を頂きました。次号でご紹介いたします。



閑話——目録こぼればなし——

## 「鬼平」と忠敬の縁

安藤 由紀子

調査のため尾形氏の記事は中断します

前号で忠敬の内弟子、尾形謙二郎の書簡を紹介し、彼の生涯について「何か分かるかもしれない」と書いた。

彼の実父は、会田算左衛門（有名な関孝和のライバルだった人）であるが、実母は今まで不明だった。世田谷にある彼の六通の手紙をじっくり読んでみると、佐原村のとなり津宮村の人々——久保木清洲や大川治兵衛——について、特別親しげな、懐かしげな記述が多い。

彼は追伸に、必ず「津宮はどんな様子でしようか」「津宮によろしく」と書き、御家人に婿入りするとき忠敬に借りた借金は、いままで貯めた「津宮への預け金」で清算してくれと頼んでいる。このお金は、測量のお給金らしい。

津宮村の辺りに実母の鍵がありそうだと直感した。

世田谷文書の中に、和算のメモが数点あって閉口のあげく、「和算の館」というホームページを開いていらつしやる奈良市にお住まいの小寺裕先生を探し出し、一面識もないのに、このところいろいろお世話になっている。

会田算左衛門について先生にお尋ねしてみたところ、彼に江戸妻がいても不思議ではないこと、今まで分からなかった伊能忠敬の和算の先生は、ひょっとして、会田氏かもしれないこと、もしそうなら、忠

敬は会田最上流の直弟子かもしれないこと、などを教えてくださった。会田氏の子孫がおいでなので、そちらに史料の問い合わせをしてみたら、とも勧めていただいた。

この重要な調査にはとても時間が掛かりそうなので、内弟子の書簡紹介を一時中止せざるを得なくなった。

\* \* \* \* \*

私は今、世田谷の伊能家にある未公開文書（千点前後）の目録を作成中で、だからだと何年もかかっている。近世は専門でなく手に余る作業なのだが、追い込みに入って、メールで方々の専門家を煩わせており、来年三月までにはなんとかまとめようと、今年の夏は部屋に籠もって暮らした。

目録作成中の面白い話を書いてみないかとの編集長からのお勧めもあるので、「文書紹介」を中止し、時間稼ぎのつもりで、一つ二つ書くことにした。

当記事は、むかし朝日新聞千葉版に短縮して載せた話を、もとの長さに戻して直しを入れたもので、「閑話」として読んでいただきたい。まだこの誌面には載せていないので、初めて読む方もあるかもしれない。

\* \* \* \* \*

### 伊能忠敬の手紙

千葉県史料「伊能忠敬書状」は、伊能忠敬記念館蔵の忠敬書簡の活字化だが、年代考証がされていないのでたいへん使い勝手が悪い。し

かし、目録作りには不可欠の史料なので、全文をコピーにとり、一通ずつバラして丁寧に読み、年代を推定して並べ替えてみた（不明のものが、何通か残っている）。

そして一五七番（千葉県史料「伊能忠敬書状」二二五頁）の書簡に出会った。寛政五年、忠敬が佐原で名主在職中に書いた手紙で、隠居して江戸へ出る二年前のものと分かった。内容を簡単に要約してみよう。

「昨日、火付盗賊改役、長谷川平藏様配下の同心、杉浦様外二人の方々が佐原村において盗品質入れについて取調べがあった。佐原村田宿の鍛冶屋清兵衛が、友達に頼まれて盗品一六点を永沢藤次郎方へ質入れたのだが、その友達が、実は取手近在の強盗だったため、共犯と疑われてしまった。

鍛冶屋清兵衛は去年婿入りした者だが、家では大急ぎで離縁して追出してしまったところ、当人不在につき、という事で、母親と五人組残らずお呼び出しになり、質屋も含め大勢出府せねばならず、大変困っている（日付が八月一日なので、農繁期に当たる）。皆律義もので、清兵衛とても、知らないでやったこと。それにしても、後難を恐れて、追出したのは、浅はかだった。

長谷川様に、内々お頼みなされ、一日も早く一件落着になるよう、お執りなし願いたい。委細は組頭と質屋からお聞き取りのこと。」  
という内容で、呼出しを受けた人達に、この手紙を持たせて、出府させたものらしい。

ところが、名宛人が「放牛丈へ」となっていて、これが誰だかわからない。これは、見たことのない号であった。敬語が少ない事と、他

の文面からして、相手は伊能家の江戸店の人ではないかと見当をつけた。当時二つあった江戸店を切り盛りしていたのは、子供の頃養子にして長女イネの婿にした伊能盛右衛門と、共同経営者の加納屋新兵衛だったが、彼等に長谷川平藏に直接口を開けるほどの力があつたとは、とても思えなかった。

#### 惣兵衛・忠敬・盛右衛門

その時ふと、「牛歩」という号を思い出した。この号をもっていたのは九十九里の網元、飯高惣兵衛という人なので、ここで舞台を忠敬が少年期を過ごした九十九里に移す。

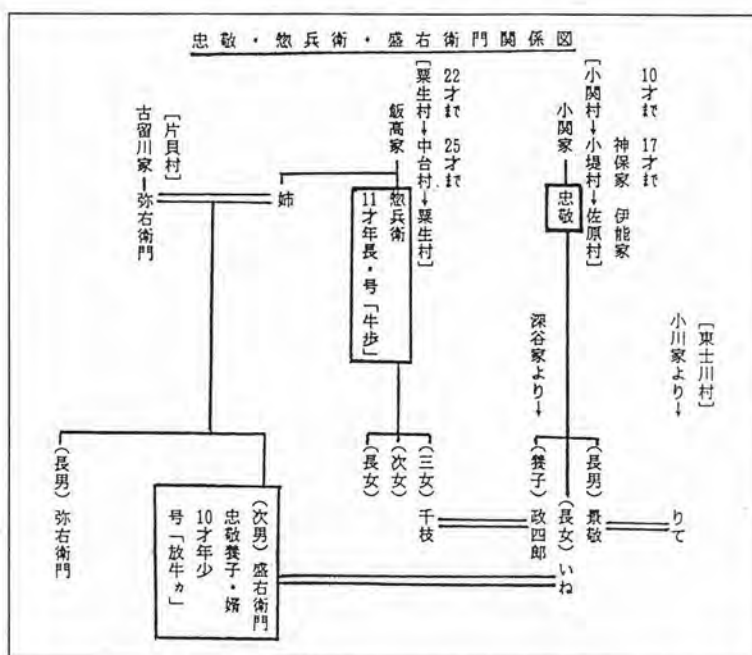
次の史料は、この惣兵衛と伊能盛右衛門と伊能忠敬の縁戚関係、及び、三人の関係する村々を示したものである。

忠敬は生まれて一〇年間小関村で過ごしたが、となりの栗生村に一才年長の網元、飯高惣兵衛がいて、肉親の縁の薄かった忠敬にたいして、父や兄の代わりをしてくれ、二人は「莫逆之友ニテ相続キ親友」（忠敬宛惣兵衛書簡）の間柄であった。

忠敬の婿、盛右衛門は、その惣兵衛の甥にあたる。この図にある三家は、共に格の高い家で、このようなクラスの家はどこかで縁戚になっている。

#### お婿さん

今話題にしている三人、忠敬・惣兵衛・盛右衛門は、いずれもお婿さんかまたはお婿さん経験者である。このあたりには、姉家督という相続のかたちがあつて、男子がいても、長女に優秀な婿を迎えておく習慣があつた。人がいつ死ぬかわからない時代だし、弟が出来が悪く



でも安心である。江戸時代商家では、このような女子相続が一般的だったようで、経営の才がただちに家の浮沈に関わるためである。これは、九十九里の商品流通の盛んな経済状況に関係があるのかも知れない。

飯高惣兵衛もいったん中台村へ婿入りし、実家の跡継ぎが死んだの

史料二 地圖



で妻をつれて帰ってきて、実家を継いだのである。忠敬が八才の盛右衛門を養子にし、後に長女の婿にしたのも、そのつもりだったかと思える。お婿さんになれるということは優秀な人材である証拠だった。男と生まれて婿の口が掛らぬようでは……ということだったらしい。

事実盛右衛門は優秀な人で、江戸店をまかされ、忠敬の暦学書の注文をさばき、色々な相談にも応じている。このあと、運悪く米相場に失敗して勘当されるのだが、まだ寛政五年の段階では、十分忠敬の信頼を得ていた。盛右衛門が伊能家へ婿入りしたのは、勿論叔父惣兵衛の推薦によると思われる。その上忠敬の父方神保家の祖母の実家は、

片貝村の古川家の一族で、忠敬と盛右衛門は遠い血縁にあたる。

文書の端々から推測すると、この叔父は甥をたいへん可愛がっていたらしい。叔父が「牛歩」なら、「放牛」という号は、忠敬の甥にのぞまれた盛右衛門のものかもしれないと考えた。

### 伊能忠敬は九十九里の人

それにしてもこの関係図と地図を見ていると、伊能忠敬は九十九里の人だったのだということが、よく分かる。生まれて一七、八まで育った風土が、心の核になると思われるから、伊能忠敬を考える上で九十九里浜をはずすことはできない。

長女イネへの手紙によれば、長男の嫁にも長女の婿盛右衛門と同様に総の人を所望し、事実、すぐ近くの東士川村（現東金市、宿）の、小川家から迎えている。仲介の労をとったのは、たぶん惣兵衛と盛右衛門とイネだと思われる。

下総佐原の伊能家に單身婿入りした忠敬は、こうして九十九里の海の香りのする人々を、身の回りに集めていったのではなからうか。

小島一仁先生の「伊能忠敬」によると、九十九里浜は全国一の鰯の漁場で、干鰯<sup>ほしか</sup>に加工され、佐原を中継点として西国へ運ばれ、綿作の肥料になった。飯高惣兵衛も、網元で干鰯問屋でもあった。九十九里の塩も関東一円に市場を持つていて、干鰯と塩は、水路はもとより、陸路も運ばれていった。九十九里から北へ北へと佐原をめざすこの「干鰯と塩の道」は、忠敬の人生のひらけてゆく道でもあった。

### 片貝村

やがて、「九十九里浦と伊能忠敬……飯高惣兵衛をめぐって」という本で、安永九年に飯高惣兵衛が役所に届けた親類書というのを見た。

そしてこの盛右衛門の生まれた古川家は、片貝村の旗本長谷川平蔵の知行地にあることを知った。

### 史料三 親類書

#### 本国生国

上総国山辺郡粟生村

飯高惣兵衛 当子四十六歳

#### （中略）

#### 一甥

長谷川平蔵様御知行所

片貝村組頭 弥右衛門

#### 一甥

赤井弥十郎様御知行所

四天木 四郎右衛門 養子

#### 一甥

津田日向守様御知行所

下総国佐原村 三郎右衛門 養子

#### （後略）

一行目の「甥、長谷川平蔵様御知行所、片貝村組頭・弥右衛門」というのが古川家をついだ盛右衛門の兄で、一人おいて次に弟盛右衛門が、佐原村三郎右衛門養子（三郎右衛門は、忠敬を指す）として記されている。この時二五才であった。

片貝村の支配関係を知るため図書館にいき、「九十九里町誌」と「山武町史」を見た。九十九里辺の支配は、モザイクの様になっていて、天領、小大名領、旗本知行地、南北の江戸町奉行与力給地、など、一村が色々な領主をもっていることが分かった。

隣の家は別の領主へ年貢米を収めるということがあったり、一方領主の方も、例えば五百石取りの場合、三か所の村から五〇〇石になるように、貰ったりしていた。長谷川平蔵は、山辺郡片貝村と隣の武射郡

森村で、四〇〇石を与えられていた。

平蔵の頃の片貝村は、「片貝村の知行の内訳」（史料四）のようになっていた。年貢の納め先が、一村で五種類もあったというところらしい。したがって平蔵に年貢を収めていた農民は、そんなに多いとは思えず、名主・組頭層に限れば、もっと少数になる。そのうちの一軒が古川家だったのである。

#### 史料四 片貝村知行の内訳

1	大名、松平豊前守家	一〇、四三三石の内	一九〇石	南部
2	旗本、本間家	一、八〇〇石の内	一部	西部
3	旗本、長谷川家	四〇〇石の内	一部	中部
4	天領			北部
5	江戸北町奉行与力給地		一四七石	東部

（九十九里町誌より）

#### 長谷川平蔵

鬼平の歴史的事実については、滝川政次郎氏の「長谷川平蔵：その生涯と人足寄場」という優れた本がある。鬼の平蔵は、火付盗賊改役として有名なばかりでなく、隅田川河口の佃島付近を埋め立てて「人足寄場」を作り、刑の定まった者の授産所とした。佃島に行くと、ちゃんと説明板が立っている。これは彼の独創による、当時外国にもない進んだ施設で、滝川氏はこの点で平蔵を評価し、世に知らせるためにこの本を書いた、と「あとがき」に記している。

長谷川家の系図（史料五）によれば、この家は、寛文一一（一六七

一）年から幕末まで約二〇〇年の間ずっと四〇〇石であった。平蔵の父宣雄は、裁判の能力をかわれて京都町奉行まで勤め、鬼平こと平蔵、宣以も火付盗賊改役として、また、人足寄場の創設者として高名であったにもかかわらず、代々禄の少ない、小身の旗本だったことが分かる。

#### 史料五 長谷川家系図

長谷川家 藤原氏、秀郷流 家紋、左藤巴釘抜

（前略）七代宣尹―（西の丸書院番・布衣）―八代宣雄（京都町奉行・備中守）―九代宣以―（火盗改め・人足寄場を作る・布衣）―

（後略）（九十九里町誌より）

小身の旗本は、知行地（采地ともいった）を支配する代わりに、その分の蔵米をもらう場合もあったが、長谷川家では二〇〇年近くの間、上総の采地を直接知行することを望んだ。

蔵米取りの場合、豊作でも凶作でも確実に支給され、生活は、安定する。これに反して、采地を支配しているものは、凶作の時には年貢をまけてやらなければならないが、豊作の時に返しがある。名主達からは、付け届けもある。煤払いや餅つきなどの年中行事の時や、結婚とか葬式とか、一たん事ある時は大勢が駆け付けてくれる。行儀見習いという名の女中奉公にもこと欠かぬという具合で、農民と親しく、生産者と消費者が、今でいう「顔の見える」関係を結んでいたわけだから、長い目でみれば、蔵米で貰うよりも、知行取りの方が得だったらしい。

「鬼平犯科帳」で、主人公は、昔お縄にした者を私立探偵のように



大勢使つて捕物を成功させるが、これは実際にあったことで、彼等を自費で雇う。火付盗賊改役は、江戸での権勢はたいしたものだったが、物入りも多く裕福な旗本でないと勤まらなかったようだ。なにしろ、屋敷の中に、お白洲も牢屋もあり、付属の与力・同心が、四〇人あまりも出入りしていたという。

平蔵が何故そんなに富裕だったかといえば、一つには、広い拝領屋敷を町人に貸し、その家賃収入が多かったこと、もう一つは、彼の知行地が豊かで開墾の余地が十分にあり、年々出目を生じて実高が表高を上回り、五〇〇石にも及んだからだ、滝川氏は推定しておられる。豊かな土地で二〇〇年間、お互いに何代にもわたって付合ってきたのだから、平蔵と片貝村の人々は、きっと和気あいあいとやっていたのではなからうか。

### 上総の女

この本の第二節は「誕生」となっていて、読み進んでいくうちに、意外な事実に出くわした。父宣雄の正妻には子供がなく、『寛政重修諸家譜』には、平蔵について「母は某氏」とあり、某氏という時は、農民・町人の女をさすのだと書いてある。また、『近世行刑史』には、「母は家女」とあり、家女とは、家の子郎党の娘のことを指すという。ここにいたって著者は、平蔵の母は長谷川家の采地から奉公に上がった、上総の女であったと断定される。平蔵は官につく前、「本所の鍔」(彼は幼名を鍔三郎といった)とあだ名される遊び人だったため、後に江戸の人情に通じた良き裁判官たりえたといわれている。これについて滝川氏は、「武家ならぬものの血のなせる業かもしれぬ」と述べておられる。

伊能忠敬の家業の最大の協力者であり、相談相手でもあった有能な

婿、盛右衛門の血縁である女性が、長谷川平蔵の母親だった可能性は充分にある。一步ゆずつても、彼はその人の実家と、勿論だいぶ年上だが、どんな姿の人かをよく知っていたのだ、と断定できる。

行儀見習いには、やはり、名主・組頭層の娘が上がったと思われるからだ。この女性は、息子よりずっと長生きをしたらしいから、冒頭に紹介した忠敬の手紙が書かれた時、鬼平の屋敷に同居していた可能性もある。こう考えてくると忠敬が、「長谷川様に内々お頼みなされ、一日も早く一件落着になるようお執りなし願いたい」という依頼の手紙を書いた背景に、納得がいく。

盛右衛門は、長谷川平蔵と口がきけたのである。

### 江戸、深川

忠敬と鬼平のご縁には、まだ続きがある。年譜(史料六)によれば、彼等二人は同じ年の生れで、働き盛りを迎えたのも同じ頃である。天明六年、平蔵は武官の最高位、御先手弓頭として役高一、五〇〇石を貰い、忠敬は米回送で巨利を得て、天明の飢饉に村民を救い、村から一人の餓死者も出さなかった(二年後に忠敬は、酒造高一、五〇〇石を達成)。ともに四二歳であった。

しかも縁というものは不思議なもので、平蔵は寛政七年五月一〇日に、突然現職のまま亡くなり、一九日に喪が発せられたが、その同じ五月、すれちがいに、伊能忠敬が佐原から同じ深川へ出てきて、江戸で勉強を始めた。忠敬の第二の人生の始まりである。今と違って、長生きの方が得になる、よい時代だったとつくづく思う。

二人の家はすぐ近くだった。地図(史料七)によれば、忠敬の引越し先は深川黒江町、平蔵の家は深川本所二ツ目の角屋敷で、直線距離で一、八〇〇ほどしか離れていない。

寛政2 (1745)	宣雄の子として生まれる 月日不詳 幼名鉄三郎 (1)	1月11日小関家に生まれる 幼名三治郎 (1)
宝暦12 (1762)		伊能家へ婿入り 名主後見 (18)
明和3 (1766)		長男出生 凶作に付、救民 (22)
明和5 (1768)	將軍家治にお目見え (24)	
安永1 (1772)	父、京都町奉行となり、共に上京 (28)	
安永2 (1773)	父死亡に付、跡目相続 小普請入り	
安永3 (1774)	御書院番に任 (30)	
天明1 (1781)		名主拝命 (37)
天明3 (1783)		凶作に付、救民 苗字道中帯刀を許さ る (39)
天明4 (1784)	西丸御徒士頭に任 布衣となる (40)	村方後見を拝命 (40)
天明6 (1786)	御先手弓頭に任 役高1500石 (42)	関東凶作、関西米回送、江戸で巨利を 得て救民 (42)
天明8 (1788)	火付盗賊改役に任 (44) 以後死去ま で7年間活躍	伊能家の酒造、年産1480石 (44)
寛政6 (1794)		隠居 名を勘解由と改める (50)
寛政7 (1795)	4月発病 5月6日將軍家齊、葉を下賜 同月10日死去 同19日發喪 (51)	5月江戸深川へ転居。日付不詳。 高橋至時の門弟となる (51)
寛政12 (1800)		第一回測量に出発 (56)



引越したての忠敬は、あわててお葬式にでかけたかもしれない。もし婿の盛右衛門が江戸の店にいれば、当然、手伝いに駆け付けたと思われるが、少し前に米相場に失敗し、勘当されて片貝村に帰ってしまっていた（因みに、父忠敬に離縁をせまられた長女イネは、夫と共に江戸を出てゆくことを選んだ。盛右衛門の叔父惣兵衛は、忠敬の短慮をいさめる長い抗議文を書いている。忠敬は、もう一人息子を勘当しているから、身内の失敗には特に厳しい、怖い人だった）。

## 余談と結び

余談になるが、このあと、平蔵の屋敷には、天保期の江戸町奉行、金さんこと、遠山左衛門之尉景元が住んだ。彼の父も長崎奉行を勤め、本人も若い頃アウトローだったりして、よく似た人生だった。お白洲や牢屋も、続けて使ったのだろうか。この種類の旗本の官舎のようなものだったのかもしれない。

遠山の金さん宅の載った「江戸切絵図」は手に入りやすいから、これを片手に、忠敬の住んだ黒江町と、本所二ツ目の旗本屋敷跡を回ってみると面白い。

この話から、二つのこと、忠敬にとって九十九里がどんなに大切な故郷だったか、江戸へ出る前彼がいかに頼れる名主だったか、が分かる。

忠敬は九十九里から單身佐原に婿に来て、娘の婿にも息子の嫁にも九十九里の人を選んだ。そして鍛冶屋が、来たばかりの婿を追い出してしまったばかりに、大勢に呼出しがかかって右往左往している佐原の村人のために、「鬼平」に執りなしを願い出てやったのも、九十九里の縁につながる婿の盛右衛門を通じてであった。

成功したかどうか、残念なことに資料がなくて分からない。

## 参考文献

- |                       |          |
|-----------------------|----------|
| 「伊能忠敬書状」              | 千葉県史料    |
| 「伊能忠敬」                | 小島一仁     |
| 「九十九里浦と伊能忠敬」          | 三省堂      |
| 「飯高尚寛惣兵衛をめぐって」        | 古川 力     |
| 「長谷川平蔵」               | 湊川政次郎    |
| 「その生涯と人足寄場」           | 中公文庫     |
| 「九十九里町誌」              | 千葉県九十九里町 |
| 「江戸切絵図」——持ち歩き江戸東京散歩—— | 人文社      |

（あんど うきこ・忠敬研究家）



九十九里町 伊能忠敬記念公園

## 良助の次男 榎本武揚 (前号のつづき)

伊藤 栄子



榎本武揚 箱館五稜郭で抗戦して敗北。  
特赦後、北海道開拓につくす。のち政府高官を歴任。北海道大学北方資料室蔵。

文政六年十二月一日、箱田良助は天文方出仕を仰付けられ、暦局の高橋景保のもとで、暦法の研究に従事した。その間、実は五十両で旗本の株を買い、榎本家に入夫した。妻との間に長女が生まれ、長じて御徒士役の者に嫁した。良助の妻は文政十年に病死していた。そのあと後妻として、もと一橋民部卿御馬預り林代次郎の娘、琴を迎えた。この人が武揚の母である。天保元年に次女らくが生まれ、のちに御鷹匠、鈴木金之丞の妻となったが、若くして未亡人となり、観月院といった書状では観月という名でも出てくる。この姉は武揚が最も慕った人で、賢婦人として名高かった。天保三年、長男勇之助武与が生まれる。良助こと園兵衛はすでに旗本として、天保四年七月には西丸御徒目付、

また文恭院(徳川家斉)の御付となり、將軍家側近の御用に精勤して、御上の御覚えも大変めでたかった。そののち、次男の武揚は天保七年八月二十五日に生まれた。通称長男は鍋太郎、次男は釜次郎という。あの大真面目な良助が、男子二人をこういう名にしたのは、鍋と釜を付けておけば、「一生食うには困るまい」と考えたからだそうである。この時代この様な発想は、特別に奇妙なことではなかった。金や物に恵まれるようにと、男子で蔵のつく名は多いし、女子でも、かねさん、くらさんは普通の名であった。榎本家には他に、釜次郎に歌という妹がいて、江連家へ嫁いでいる。

十二才で釜次郎は昌平黌に入った。過程は五年で試験があり、その結果、甲を得れば幕府の上吏に、乙までは、それ相当の役人に登用されるが、丙の成績の者は書付けのみであった。この試験は、幕吏になるための登竜門である。ここで釜次郎は丙を貰った。彼はよく勉強したのに丙をとり、吟味委員の不公平を憤って、昌平黌を去ったという。実は同じ頃、やはり昌平黌の試験を受けて幕吏になった「軍艦奉行木村摂津守」中公新書：を私は読み、摂津守こと木村喜毅が、昌平黌の試験で、五番のうち、二番のテストを勤務の都合で受けられず、不合格を覚悟していたのに、こちらは合格したという一文を見て、釜次郎のいう不公平や、納得のいかない事も理解できた。

昌平黌は官学の本拠であり、この甲乙丙という評価は、明治になって小学校令が發布され、その後第二次大戦の終戦後、学制が改革されるまで、公立小学校から官立の大学まで使われていた。さらに当時の徴兵検査の評価も、これに準じたものであった。

釜次郎は物事に意欲的であり、積極的な性格で、昌平黌に在学中から、英語の勉強にも通っていた。その頃、天保十二年(一八四一年)

に漂流し、アメリカの捕鯨船に救われ、米国で教育を受けて帰国した中浜万次郎（ジョン万次郎）は、江川太郎左衛門に預けられ、江川の江戸屋敷で英語の塾を開いていた。この時代としては、直輸入のナマの英語が勉強できる唯一の塾だったといえよう。ここで万次郎から英語の授業を通して、外国の事情を聞いたことは、彼の目を大きく日本以外の世界に向けるきっかけとなった。また彼はここで、江川太郎左衛門からオランダ語をも学んでいたのである。父の良助は十年程曆局にいたから、閉ざされた当時の社会でも、外国語がどんなに必要な学問かを、この父からも聞いていたのであろう。

榎本武揚というと、戊辰戦争の最後、箱館の五稜郭に立てこもり、官軍に抵抗した旗頭という印象が強かった。たしかに、この戦いで死を覚悟した釜次郎であったが、ここでの出来事は、釜次郎の後の人生から見れば、ほんの一部にすぎず、残念なことに、昔の歴史の本は釜次郎が本領を発揮した明治の外交には、余りふれていない。

### 釜次郎、海を渡る

箱館奉行堀利熙としひろの仕事は、ロシアとの交渉と海防であった。安政元年（一八五四）釜次郎は堀の下で小姓として働いていた。当時、箱館は無防備の状態であり、箱館奉行所や会津藩、南部藩の藩邸は、箱館湾に近く、外国艦船の射程距離内にあった。そこで五稜郭の建造と、位置を決定したのは堀である。五稜郭は幕府が、北方警備の箱館奉行庁舎として建てた日本最初の洋式城郭であった。ここから、十八才の釜次郎は堀に従って、北蝦夷（サハリン）を廻ったといわれる。

箱館が正式に開港したのは、安政二年三月であった。箱館は当時、世界でも例を見ない数の軍艦が集まり、捕鯨船も多く入港していた。これらの船を見ながら、釜次郎が、これからの日本には海軍が必要と

考えたのは、当然のことであつたらう（函館となるのは明治二年）。丁度その頃、幕府は洋式海軍の創設を決定し、長崎に海軍伝習所を開く準備が進められていた。釜次郎は、出願したが落ちてしまった。そこで、学友であつた井沢謹吾の父、大目付、井沢美作守に頼みこんで、謹吾の付人として、潜り込んだという。それからの彼は、二年の間に学問のほか、軍艦内に必要な作業、火夫、鍛冶工、機器部員として働き、オランダから派遣されていた教官カッテンディーケの目にとまる。安政六年（一八五九）二月、榎本らは卒業、同時に伝習所は閉鎖され、新たに築地に海軍操練所が開かれた。彼は直ちにその教授に任命され、江戸へ帰った。万次郎もこの英語の教授となっていた。

万延元年（一八六〇）正月、条約批准交換のため、遣米使節が米艦に乗って出発した。また勝海舟は威臨丸の館長として、これより先に出航している。威臨丸には、帰国をする米国の士官と、通詞として中浜万次郎も同乗していた。この年三月三日、井伊大老が桜田門外で殺され、その最中に遣米使節団と威臨丸一行が帰国する。八月、釜次郎の父良助が七十一才で死去した。また釜次郎とサハリンへ渡った箱館奉行だった堀もこの頃自刃している。世情の動きは実に目まぐるしい。幕府はかねて軍艦三隻をアメリカに発注し、留学生を派遣する予定であつた。釜次郎もその中に入っていた。ところがアメリカで南北戦争が始まり、予定は変更された。文久二年（一八六二）改めて軍艦一隻をオランダに注文して、留学生もそこに送ることになった。当時のオランダは、国力は少々斜陽化していたが、この国は捕鯨によって、造船と航海技術を発達させてきたから、この方面では一流であつた。

文久二年（一八六二）六月、長崎からオランダ船で、印度洋を廻り翌年の四月にロッテルダム到着。かつて、長崎の伝習所で化学を習つ



たドクトル・ポンペが留学生の世話をしてくれ、何よりも幸いだったのは、釜次郎を高く評価していた教官のカッテンディーケが、時の海軍大臣となっていたことであつた。

文久三年（一八六三）ロッテルダムに左の留学生が到着した。

船具、運用、砲術	内田恒次郎	25才
同右及機関学	榎本釜次郎	27才
同右及銃砲、火薬製造法	沢 太郎左衛門	29才
同右及造船学	赤松大三郎（則良）	22才
同右及測量学	田口俊平	45才
医学	伊東玄伯	31才
同	林研海	19才
法律（国際法、財政学、統計学）	津田真一郎	34才
同右	西 周助（周：あまね）	35才

釜次郎ら海軍志向の者はハーグの海軍兵学校等に入り、それぞれの軍事学に専念した。これは、ある本ではこう書かれているが、実際に行った先は、夫々数ヶ所になつていて、専門のことを学んだらしい。津田と西は複数の本で留学先は、ライデン大学と記されている。

一八六四年、釜次郎は留学生仲間の赤松則良と共に、プロイセン・デンマーク戦争を観戦武官として、デンマーク司令部を通して前戦を視察する。この事は当時のヨーロッパで、彼らの軍事力を目にした最初の日本人であつた。当時オランダにいた留学生は、各自が任務に従つて懸命に研究をし、見聞を広めその結果、幕末の海軍の大きな力となつていく。特に釜次郎の研究は多方面にわたり、航海術、機関術、

砲術の研究の他、化学、地質学、鉱物学、さらに電信術までも学んでいた。これらは我が海軍を背負つて立てるに必要な技術であり、今までの日本には皆無であつた海軍に必要な国際法規をも学んでいた。後年外交官として、他国と交渉する役割を担つたのも、オランダ留学で得た成果であつた。

慶応二年七月（一八六六）幕府が注文した開陽丸が完成したので、この開陽丸に乗り留学生三名を残して帰国する。帰国者は、内田恒次郎、榎本釜次郎、沢 太郎左衛門、田口俊平の四名の留学生、他に

水夫	古川庄八	27才	山下岩吉	22才
大砲鑄物師	中島兼吉	31才		
時計測量器械師	大野弥三郎	43才		

（父の代から暦局御用の時計師で、伊能忠敬は測量器具類、精密機器の作成を依頼した）

\*大野弥三郎は代々世襲名

船大工	上田寅吉	41才
-----	------	-----

以上の五名の職方と計九名で、その他オランダの士官と運行の船員が乗つていた。なお津田、西の両名は既に修業を終えて帰国していた。

慶応三年二月、一行が開陽丸と共に帰着した日本は、まさに非常事態の最中であつた。この年六月、釜次郎はオランダへ一緒に留学した医師、林研海の妹たつと結婚する。しかし平安な結婚生活を送るわけにはいかなかった。わずか半年にして戊辰戦争が始まり、釜次郎は幕府海軍の最高の位、軍艦奉行となり、名も榎本和泉守武揚と改め、開陽丸の船将（船長）を拝命する。が、世状の動きは早い。帰国したばかりの武揚が、この激動の日本で見たものは、薩長による倒幕運動の

波と、土佐藩の公議派、会津、桑名の倒薩派の対立の激化する騒然とした社会であった。武揚らは五年に近い歳月を外国に居たため、世の中の動揺を自らは経験していない。大方の幕末の動きの情報は得ていたものの、主家の徳川家が薩長らによって、窮地に立たされていることを目撃し、彼の心は幕軍として戦うことを決断していた。

彼が留学中に目にしたヨーロッパの各国は、すでに産業革命が達成されていて、新しい産業を興し、それから得た富によって、産業技術が発達し、軍事技術も同時に研究されていたのである。彼が海軍に係のない地質学、鉱物学まで学んだ理由はそこにあった。国のためにという理想と現実とは相反して、帰国早々激動の渦中にまき込まれ、倒幕に奔走する薩長を敵として思わずには居られなかったであろう。それに何よりも彼は教育を受けた軍艦の専門家であった。

このころ、榎本武揚を海軍副総裁とする幕府艦隊は、兵庫沖に結集していた。これは、上洛した慶喜を守護するため、幕府軍の軍艦開陽、富士山、幡竜、汽船翔鶴の四隻が碇泊していた。慶応三年十二月晦日、薩摩藩の船三隻が入港してきた。榎本武揚は空砲を放って停船を命じたが、応じないので、実弾で以って彼らを追払った。

しかし、この旧幕側の海軍力に対し、陸上戦では完全に失敗した。鳥羽、伏見では薩長兵に追討され大敗した。これに勢いを得た薩長軍は、錦の御旗を押し立てて進軍し、徳川方は朝敵の汚名を負うことになり、加えて寝返る者が出て、大坂城へ向って敗走した。

これを聞いて慶喜は、これ以上の事態の悪化をさけるために、江戸へ帰って、恭順することを決意する。大坂城は慶喜の命により、尾張、越前の藩主に託されたが、八日には長州軍が到着し、大坂城は砲撃される。城内にいた徳川方は重要書類を井戸に埋め、刀剣等を城外に運

び出した。武揚も散乱していた書類什器などを軍艦へ積んだ。その際勘定奉行から城内にあった古金、十八万両の搬出を依頼される。これは江戸に帰った後、徳川家に届けられた。榎本はこの古金の中から三万両の下賜を慶喜に願い出た。それは文久二年に幕命により、武揚らと共にオランダに留学し、今なお滞在中の伊東玄伯、林研海、赤松大三郎の学費と、帰国の費用であった。慶喜も快諾してこれを許し、武揚は直ちに横浜のオランダ領事にこれを託して送った。こうして彼らは後日、無事に帰国できたのである。

実際軍艦を動かすのは、費用のかかるもので、この時の金の中から若干が、後の北走の軍資金になったらしい。また武揚に次ぐ副総裁となつた松平太郎は、その頃浅草千束町と、銀座にあった錢座の金を預っていて、政府軍にとり戻されたが、その手を逃れた一部を彼が軍資金として、榎本軍の逃走費用に当てたともいわれる。

#### 北走と入獄

慶応三年十月十四日大政奉還。同十二月九日王政復古が宣言され、山岡鉄舟や勝海舟らの努力により、西郷隆盛と会談し江戸城は慶応四年四月（一八六八）無血開城の運びとなり、慶喜は水戸へ隠退が決定した。その後も陸上では、奥羽列藩の抵抗もあったが、彰義隊が敗北し、もはや旧幕臣の反恭順派にとつて、江戸は本拠ではなくなった。

前から榎本は蝦夷植民の嘆願書を、朝廷に出し続けてきたが拒否された。蝦夷地植民は、藩の禄の無くなった者達の活路を見出だす手段であり、同時にロシアの南下を阻止するためでもあった。その前から政府は幕府軍艦の引渡しを要求していた。品川沖の榎本艦隊は、八月十九日房総廻り北に向って出航した。途中仙台沖に碇泊、各地の戦いで敗れて集った兵の服装はまちまちで凡そ二千五百、激しい風雨のな

かを出発した。十月十九日、新暦でいえば、十一月十四日吹きすさぶ風雪を押して噴火湾の驚の木に上陸する。榎本にとつて、箱館は堀利熙に付いて滞在して以来であるが、土地勘はあった。榎本は再び蝦夷地開拓の嘆願書を、新政府知事に届けるために、先遣隊を出発させたが、箱館に向かう途中の先遣隊を、七重村の付近で箱館の政府軍が襲った。こうして戦闘が開始された。これ以後のことは、私共が歴史の教科書で学んだような結果で、戦いは激烈をきわめ、榎本軍はそのすべての軍艦を災害で失い、土方歳三は五稜郭で戦死する。五月十四日政府軍の黒田参謀は、降伏勧告書を榎本へ送った。これに対し、武揚と松平太郎の名で、自分達は凍餓にせまる臣民の活計を定め、加えて北門の守衛を致し度き志願に外ならず、この願いが聞き入れられたなら、自身はどんな嚴罰を受けてもよいという返書と、「海律全書」を黒田に託した。すでに死を覚悟の上だったことがわかる。

「海律全書」はのちに「海上国際法」または「海上万国公法」ともよばれ、オランダ語で記されていて、榎本が留学先から持ち帰った本である。彼の帰朝当時、日本では国際法に関する知識のある者が殆どなく、その為め日本は国際関係において、非常に不利な条約を締結していたことを考えると、まことに貴重な書であった。

明治二年六月三十日、降伏した榎本武揚、松平太郎、大島圭介、永井玄蕃、沢太郎左衛門等の計十名が首謀者として、東都に送られ、辰の口の牢屋につながれた。

### 獄中生活

辰の口の牢舎は、兵部省札問所（戦前の軍法会議所）付属の仮監獄所であった。ここは元來、軍の裁判にかけられたり、陸軍が拘引してきた者を留置していたが、当時の警察力が不備であったため、中には

一般の殺人、放火、強盜、恐喝などの無頼の徒もまじっていた。だが、小伝馬町の牢舎よりは、兵士の牢であったから、内部も幾分良かったのではなからうか。揚屋（あがりや）と呼ばれていた。榎本が房に入るとすぐに、その房の牢名主が、大声で彼に向つて「しゃばにいた時、どんな悪事をしたか名を名乗れ」とどなった。榎本は「己れは、箱館戦争の榎本じゃ」というと、一同驚いて平伏し、それから、榎本を牢名主として、下にも置かない扱いで、これ以後彼は獄中で楽をして過したという。当時箱館戦争の事が、獄中にまでこんなに早く伝わっていたことに驚く。ともかく、獄中というのは、身分、立場、「地獄の沙汰も金次第」という諺の通り、金が物をいう所である上に、内部では私刑（リンチ）が平然と行われていた。世間的にそうした風聞は広まっていたから、彼の身内は、生活苦の中、物や金の差し入れをしたことが書状に度々出てくる。榎本以下七名は牢名主として、つとめて囚人達の面倒を見、彼らを勞つてやった。牢を出た囚人達は榎本の様子を、彼の家に伝えたり、後年も何かと慕つて来たという。

最初獄中では、読書、書き物などできなかったが、次第に係りの役人も、目こぼしをしてくれる様になり、筆や紙も手に入ると外への書簡も差し出し自由となつた。差し入れられた本は、和漢書、外国語、科学書等、暗い牢屋でも、ゆつくり読書に耽ることができたという。この中で彼は、発表はされなかったが、著述までしている。また自分の勉強ばかりではなく、時には、大島圭介、荒井郁之助らに西洋の學問を教え込んでいる。榎本らは入獄した時、夫々の房に入れられたが、後には皆一緒の房になり、同囚の少年らに漢学や洋学を教えて、牢はまるで塾のようであったという。手紙には、弟子三千と迄はいわないが、今八十九名の生徒がいると書いている。明治二、三年頃の牢屋は、幕府時代の延長のようなもので、未決囚のみを収容する場所であった。

従つて刑が決まれば出て行くから、出入りは激しい。現代のように、懲役（ちようえき）何年という囚人を長期に置く施設ではなかった。二年半の間、市井の無頼の徒と同じ房内で生活をしたことは、榎本にとつて、人間味ができたといわれ、彼が学問を教えた代りに、都々逸、端歌、清元などを彼らから習い、後年酒席でよく披露したという。

ある時、武揚が読書の中でも蘭語の化学書を望み、家人が福沢諭吉に頼んで差し入れたことがあつた。その時の書状を紹介したい。

武揚より姉への手紙

前略、福沢子より之書一冊並、同人手紙外新聞紙二冊、御兄様御返書宅通共、憶二落手仕候 難有御礼奉申上候 さて福沢子より之書は、同人方江差戻可被下候右之書は、福沢位の学者のほんやくする書にして、小子杯之筆を勞する迄のものには無之候 乍去同人人事、無遠慮種々申聞候事、こふまん（高慢）ちきとて一同大笑いたし候へども、正直なる人物と相見へ候間、別紙宅通同人江差遣度候間、御姉様御手紙江御差加へ御遣し可被下候 實は、此方一同福沢之不見識には驚入申候 もそつと学問ある人物と思ひしところ、存外なりとて半ば嘆息致候 是位之見識の学者にても百人余之弟子ありとは、我邦未だ開化文明之届かぬ事知るべし。夫はさておき、同人事周旋にて、他之セーミ書差賜可申と存候間、別二御姉様より此儀、改めて御たのミには及不申候 左様御承知可被下候

武揚より姉への手紙  
前略、福沢子より之書一冊並、同人手紙外新聞紙二冊、御兄様御返書宅通共、憶二落手仕候 難有御礼奉申上候 さて福沢子より之書は、同人方江差戻可被下候右之書は、福沢位の学者のほんやくする書にして、小子杯之筆を勞する迄のものには無之候 乍去同人人事、無遠慮種々申聞候事、こふまん（高慢）ちきとて一同大笑いたし候へども、正直なる人物と相見へ候間、別紙宅通同人江差遣度候間、御姉様御手紙江御差加へ御遣し可被下候 實は、此方一同福沢之不見識には驚入申候 もそつと学問ある人物と思ひしところ、存外なりとて半ば嘆息致候 是位之見識の学者にても百人余之弟子ありとは、我邦未だ開化文明之届かぬ事知るべし。夫はさておき、同人事周旋にて、他之セーミ書差賜可申と存候間、別二御姉様より此儀、改めて御たのミには及不申候 左様御承知可被下候



一、新之助君よりフナネル被下難有御礼申上候 乍末御一同江  
よろしく相願候 已上

釜次郎拝

十二月二十八日

鈴木御姉様

尚々別紙迄通松平君宅江、乍憚御届被下候様奉願候

\*セーミ書 (化学書)

\*新之助 (姉の長男)

### 現代文概略

前略、福沢氏よりの本一冊と、同氏の手紙外新聞紙二冊、御兄様の御返事一通など、たしかに受取りました。ありがとうございます。

さて、福沢氏よりの本は、同人へ返却してください。これ位の本は、福沢位の学者が翻訳する本でして、私などが筆を煩すものではありません。それにしても、同人が無遠慮にいろいろ言ってきたことは、高慢ではないかと、一同大笑いしましたが、正直な人と見えますから、別紙一通を添えて御返しく下さい。実は、当方一同、彼の不見識には驚きました。もう少し学問のある人物と思っていたので、がつかりしました。これ位の学者であっても、百人も弟子が居るとは、我が国未だ開化文明が行き渡っていない事と、思わねばなりません。とにかく同人の世話で他のセーミ書が送られてくると存じますから、改めて御姉様から御頼みには及びません。右御承知おきます。

一、新之助君より、フナネル (起毛のやわらかい織物) を頂きありがとうございます。末筆ながら皆様方へよろしく御伝えください。

十二月二十八日

釜次郎拝

鈴木御姉様

(以下一行略)

この手紙は、身内の姉に当てたものであったから、武揚の本音が書かれている。外に見せる物ではないので、思い通りの事を書いている。

福沢論吉から送られてきた化学書は、入門書程度であつたらしい。武揚が憤慨したのも当然であつたろう。彼の化学の知識は、その頃の日本では一流であつたと、どの本にも記されているし、武揚も化学については自負していた。それを福沢は知らなかった。牢内には留学同期生も居たから、入門書を見て一同大笑いしたのである。しかし武揚はこの事を決して外では言わなかった。福沢は幕府の頃から、武揚の妹の夫、江連加賀守 (外国奉行) の所へ出入りして親しかった。元来彼は大変な世話好きであつたから、江連家へ同居していた武揚の母に、入獄中の武揚が病氣なのでぜひ会いたいと泣きつかれた時、福沢は知恵をしぼってその労をとった。おかげで、武揚は母と面会でき、その後間もなく母親は他界した。本来なら、朝敵となつた者への面会は許されなかつたのである。また後年、福沢が武揚について、「やせがまんの説」を発表した時も、武揚は一切反論をしなかった。

入獄中の者達の処分については、中々結論が出せなくて、岩倉遣欧米使節一行が発する時まで続いた。もし、米国で榎本の処分について質問され、榎本を斬首の刑にしたなら、日本の恥であるという説まで出てきた。また中には、頭取りの榎本は死罪にすべしと、木戸孝允、大村益次郎らのように強く主張する者もあつた。黒田清隆は武揚の才を惜しみ、また「海律全書」がいかに我が国に必要な本かを説き、懸命に助命を嘆願する。これを西郷隆盛が見て感動し、助命に手を貸したといわれる。また、福沢論吉も助命に奔走した一人であつた。

入獄者達は、明治五年一月六日、出牢を赦されたが、榎本のみは暫く親類預けとなり、同年三月六日、やっと放免となつたのである。

(以下次号)

(いとう えいこ・古文書研究家)



## 伊能忠敬と久保木清淵との契(一)

佐久間 達夫

### 一、久保木清淵の関歴

利根川の下流域に位置している千葉県佐原市の市街からJR成田線の線路沿いの佐原・小見川街道を東へ千ほど程進むと右手に小高い丘が見える。

この丘の頂上(佐原市津宮字西根本)に、伊能忠敬の儒学の師であり、日本地図作製に献身的に協力した久保木清淵の墓地がある。墓地のなかで、ひとときわ高い平石に久保木清淵の墓碑銘が刻字されている。久保木清淵の関歴は、「故竹窓久保木先生墓表」「補訂鄭註孝経」「久保木氏家譜」などに記述されている。「故竹窓久保木先生墓表」は、清淵と親交があり、郡奉行をつとめた水戸の儒者小宮山昌秀の撰述である。また「補訂鄭註孝経」と「久保木氏家譜」は、清淵自身が編述したものである。

これらの史料によると、久保木清淵は、宝暦十二年(一七六二)十月に下総国香取郡津宮村(現佐原市津宮)で、清英・瑳津の子として生まれ、幼名を新四郎、諱を清淵といい、家督を継いで太郎右衛門と称した。字は、蟠龍・臨川・仲黙、号を竹窓・竹陰・翠筠亭、堂名を息耕といった。

十一歳のとき、香取神宮別当寺の一つ、根本寺の住職となった松木吞舟(北溟)について儒学を学び、中国で散逸した「孝経」を集大成し、『補訂鄭註孝経』を編纂した。

又、私塾「息耕堂」の開講、常陸国延方村(現茨城県潮来市延方)

の「延方学校」の講師として、大勢の弟子を育成した。伊能忠敬も清淵から教えを受けた。

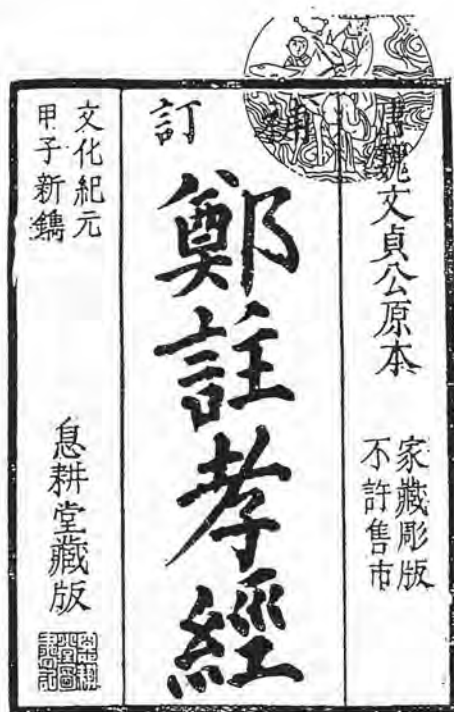
著書には、前記した『補訂鄭註孝経』のほか、『香取私記』『竹窓漫記』『西遊日記』などがある。

文政十二年八月二十八日、六十八歳で没し、戒名は、「忠恕院至徳清淵居士」という。

### 二、伊能忠敬の儒学の師

久保木清淵の代表的な著作である『補訂鄭註孝経』は、序文、本文、跋文の三つから成っていて、序文は伊能忠敬が寄稿したものである。

○ 補訂鄭註孝経(ほていていちゅうこうきょう)



補訂鄭註孝經序  
 孝經之學、古文祖孔傳、今文宗鄭註、而  
 一書出、不辭其始、世論紛紛、互相是非、  
 先儒謂、康成不註孝經、安國之傳、誤絕  
 無得、故劉子玄、稱鄭註有十謬七惡、長  
 孫之志、記古文非孔舊本、及闕元新註  
 出、一家始衰、至朱子刊誤作、古今文、  
 厥自是學者言孝經者、好崇新義、悉研  
 裂古經、孝經之學、幾乎亡矣、班志云、孝  
 經十八章、古孔氏二十二章、如之何、其  
 研裂而廢其學之爲甚、唯是一家之傳、  
 其出不詳、世論紛紛、終至于此而已、  
 如孔傳、無人識書、說劉炫獨能言其義、  
 而不如鄭氏、豈見于江左也、雖然、後世  
 孝經之學、自一家、則豈可不並存哉、此  
 仲默補訂所由起也、仲默謂、二家之傳、  
 雖不能取信於班志、而在唐以前、而不  
 得不存書說、近時學者所議、非孔傳則  
 刊誤、其有讀今文者、特闕元新註耳、雖  
 因鄭氏、亦亦不好古也、今此補訂、以羣  
 書治要爲本、普就諸家、補其遺缺、鄭義  
 幾乎可議、於是二家可並行、而孝經之  
 學、可有歸焉、仲默補訂、豈謂無補哉、余  
 在輦、嘗與仲默講古文、頃日稟  
 命於海邊測量、循察以圖方輿、故不能  
 講究此書、聊叙其旨、以題卷端、  
 文化紀元甲子七月、伊能忠敬書于東  
 都深川寓居

忠敬の序文のなかに忠敬と清淵との関係が、次のように記されてい  
 る。

余在郷 嘗與仲默講古文 頃日稟 命於海邊測量  
 循察以圖方輿 故不能講究此書 聊叙其旨 以題卷端

・筆者要約

余（忠敬）が故郷にいるとき、仲默（清淵）に古文をな  
 らった。この頃、命令を受けて海辺の測量をし、大地の  
 図に従っている。  
 故に孝経を考えきわめることができないので、少しその  
 旨を述べて、序文にいたします。

序文を記述した文化元年七月は、忠敬が第四次（東海・北陸海岸）  
 測量をし、江戸に帰着して、それまで測量した地域の資料を基に「日  
 本東半部沿海全図」を完成させ、十一代將軍徳川家斉の閲覧を受けた  
 年である。

序文では、「現在、海辺測量を命じられ、大地の図（地図）を作製  
 している。したがって、「孝経」を考えきわめることができないので、  
 少しその旨を書いて序文としたい」と、述べている。

また、忠敬が佐原村にいたとき、清淵から儒学・暦学の教えを受け  
 た。と、記している。久保木家の久保木良（よし）氏は、「清淵の玄孫・  
 清融の『忠敬異聞』に、天明元年（一七八一）伊能忠敬が名主役を命  
 じられたとき、津宮村名主久保木清英に、『お宅の息子清淵に、儒教や  
 暦学を学びたい』と、申しこんだ。入門にあたって、酒一升と餅二枚  
 を持参した。と、記してある」と、話してくださった。

### 三、伊能忠敬の実測日本地図の作製に協力

久保木太郎右衛門（清淵）家の塋域に建立されている「故竹窓久保木先生墓表」には、

#### 資料二 「故竹窓久保木先生墓表」

（伊能忠敬と久保木清淵との関係のみ記述）

又嘗與「伊能忠敬」友善、而忠敬年長、先生視之

如「父兄」。及「忠敬蒙」官命「製」輿圖「每請」先生「成」其事。

然先生謹愿、不敢以「某功語」人。故世無知輿圖之成

由於先生者矣。

#### ・筆者要約

又、嘗て伊能忠敬と友として善し。而して忠敬年長、先生（清淵）これを視ること父兄の如し。忠敬、官命を蒙りて輿圖を製する毎に、先生に請いて其の事を成す。

然れども、先生謹愿にして、敢えて其の功を人に語らずを以て、故に世、輿圖の先生に成る由を知る者なし。

久保木清淵は、津宮村の名主として村務に励むかたわら、前述したように私塾「息耕堂」や小宮山楓幹が建てた「延方学校」で大勢の弟子の教育にあたった。

また、伊能忠敬が、全国測量に携帯した「御用旗」の文字の執筆や製作をしたり、江戸の地図御用所へ赴き、日本地図の作製に協力した。

地図作製は、忠敬が、文政元年に死去した後も、天文方や久保木清淵等によって継続された。文政四年七月に幕府に提出された「大日本沿海実測録」十四巻の巻首に記されている伊能忠敬の序文は、久保木清淵が起稿し、昌平黉の佐藤一斎が添削した。「伊能忠敬日記」の文政

四年六月五日の条に、

序文下書き、津宮より来たる。

と、記述されている。

#### 資料三 「大日本沿海実測録」の伊能忠敬の序文

（久保木清淵起稿、佐藤一斎添削）

文政四年七月十日幕府上呈

寛政十二年庚申夏、官以臣忠敬師高橋至時建白之故、使忠敬測定地度、会有開拓夷疆撫循殊俗之舉、因連蝦夷而測之則徑三百里、而遙、地度可定矣、忠敬乃起程于江戸、歷奥州到蝦夷、細測其駢路里程及東沿海与極高度而還、其冬即選定地上一度之數、并造自江戸至三厩駢路程圖及蝦夷東南海辺里程圖、就至時而上之、明年有坂東海辺測量之命、自是連年有命、以測定東海北陸及奥羽海辺、文化元年甲子夏、以東国沿海測量已完、遂撰製地圖逮成至時既歿、因就其子景保而上之、九月六日經幕覽越十日恩賜忠敬積褐給俸、重有西国沿海測量之命、更使副以測量所吏、於是益精儀器、窮極驗測、十年卒業、遂即撰製以為圖、与前所上者合而觀之、大凡六十州之駢路沿海、至四周島嶼、無有遺漏、更取間宮林蔵所測、參補地圖、七更裘葛而始成、名曰大日本沿海実測全圖、共三通都三十三幅、又採録里程与極高度、以作沿海実測録十有四卷、并以上之、蓋圖書之設、所以周知地域之分界、明広袤之數度、以備經國之用也、故分州書疆、推表山川、測之有術、修之有法、而使其如視諸掌、則可以知天下之險夷通塞之處、可以察土地向背炎涼之分也、我

大日本、国于瀛海中、環以鯨波、坤基所輿斜彌十度、幅員既  
広民物繁庶、況今夷疆日闢、盡掃版圖、寰區之大於斯為盛、  
圖書之目旦備理勢然也、竊以古者嘗有風土記之設、其所撰  
錄不能及圖書、唯列疆土而不詳形勢之所在、纔載山川、亦不  
并向背之所據、特可以備典故、而竟無裨經焉、中世以來、天  
下胸々兵革相尋、圖書有無誰能徵之、慶元韃靼以來海內又寧、  
国各図籍之貢蓋無關矣、雖然忠敬嘗聞之、地理之要專驗之於  
天象、天度得正而後地勢可論、故西洋之子、能放舶于杳溟而  
週極大塊、亦不過此術也已、東方之言地理者、大率不出於分  
率準望之外、而竟無稽于天象、是以迂直雖詳、而向背之勢不  
正、広表雖著、而距遠之度難弁、忠敬自從事於斯、益研術理  
精造儀器、步其地勢則必表之於山川、推其距遠則必驗之於天  
度、而後迂直之形向背之勢、無復有乖、則天下之形勢可舉以  
定為、忠敬不敏以僅嫻測量之術、饜受重任、自量非其才、中  
心戰兢唯懼殞 恩命、於是乎凌險踏危、不顧老幼、勵謏劣之  
資、奮驚駘之力、庶幾効纖介之誠、幸膺国家文明之運、忠敬  
犬馬齒已過七十、而得跋涉萬里竟無壅塞、乃此告成焉、今所  
上全図、於忠敬所過之處、則極加詳悉、至于各国郡邑山川之  
細、則固未遑及也、然樸劉既成丹雘當施、況昇平之化之開物  
日精一日、冀更命後人補正焉則庶乎其集大成矣、

文政四年夏六月

伊能忠敬謹識

#### 資料四「伊能忠敬書狀」一六一三

『忠敬書簡』(第十六卷三)に、

御用幟之儀、委細承知致し候。のぼり手本一本は、相届き  
不<sub>レ</sub>申候。此度染立候のぼり四本、前の幟と同様に紺地白文

字宜候。夫にて六本同様に相成候。御用と斗に候得ば、前  
のぼりの通に染候方宣候。「測量方」三字書加へ候分、古  
幟に無<sub>レ</sub>之候はば、津宮御頼御書貴御染入可<sub>レ</sub>給候。猶又、尾  
形より申遣し候。

と、「御用旗」の文字の執筆や製作のことが記してある。

#### 資料五「伊能忠敬測量日記」第二次測量篇

(筆者編著『伊能忠敬測量日記』より)

享和元年七月二〇日 (飯沼村東町 田中吉之丞宅止宿)

一昨十八日着の日、佐原伊能三郎右衛門、同平右衛門、  
繁蔵、並びに清宮亀太郎、津宮久保木太郎右衛門、遠  
路見舞いに來たる。

七月二四日 津宮久保木太郎右衛門、武州、相州、豆州、両総州、  
房州の海辺地図の下書きを頼み置く。

#### 資料六「忠敬先生日記」一九、二四、三一、五〇、五一

(筆者編著『忠敬先生日記』より)

■日記一九 (五次測量帰府より六次測量出立迄)

文化四年七月二五日 白曇 久保木氏出府着

八月 三日 朝より曇天 久保木地圖初め

※一二月一七日 此日、大図、小図共控え出來上る

文化五年一月一六日 久保木太郎右衛門着

■日記二四 (六次測量帰府より七次測量出立迄)

文化六年一月二一日 津宮、久保木太郎八(清淵の弟)着

一月二六日 伊能三郎右衛門、久保木太郎八、大川治兵衛

小網町迄越す 二七日朝出立

文化六年五月三日 朝より晴天 久保木太郎右衛門来たる

六月一六日 曇天、微雨あり 津宮久保木氏帰る

■日記三二 (七次測量帰府より八次測量出立迄)

文化八年一〇月二五日 朝より天気 此夜、久保木来たる

■日記五〇 (八次測量帰府以後)

文化一一年七月二日 今郡村、津宮太郎右衛門書翰持参

測量届之由申し来たる

■日記五一 (八次測量帰府以後)

文化一二年一月二二日 曇、昼後雨 久保木太郎右衛門登る

一月二四日 雨 久保木太郎右衛門、ひらめ一枚贈る

一月二九日 晴天 久保木、佐原村へ今朝出立

※伊豆測量の儀、被仰付候

九月三日 晴 久保木俊蔵来たる

九月二一日 晴れ曇 久保木俊蔵帰国

文化一三年三月二二日 晴 下総国津宮、久保木俊蔵来家

四月二日 曇晴 津宮村、久保木俊蔵帰国

四月九日 晴 総州津宮村、久保木俊蔵来たる

四月二一日 曇 久保木俊蔵帰国

四月一七日 晴 津宮村、久保木太郎衛門来たる

四月一八日 曇朝雨 下総津宮村、久保木太郎衛門来る

四月二四日 曇、微雨 久保木太郎衛門来たる

四月二六日 晴 津宮村、久保木太郎衛門来たる

四月二八日 朝晴天 四ツ頃より曇天

久保木太郎右衛門来たる

五月一一日 晴曇 夜大雨 久保木太郎右衛門来たる

文化一三年一〇月一九日 晴曇 津宮、久保木俊蔵来たる

文化一四年 三月二二日 津宮村久保木太郎右衛門、先達而出府被

仕居候処、為「滞留」、今晚より来宿

※御府内地図大成に付、上納 八月一九日

文化一四年一〇月一八日 雨降る 下総津宮、蟠龍来たる

一〇月二六日 晴 久保木蟠龍帰郷

一一月二一日 晴 久保木蟠龍来たる

一二月二四日 晴 久保木蟠龍帰郷

資料七「伊能忠誨日記」 (筆者編著『伊能忠誨日記』より)

文政三年六月三〇日 晴天 久保木俊蔵来たる

七月 四日 薄曇 久保木俊蔵来たる

七月 五日 雨天 久保木俊蔵帰る

文政四年一月一八日 久保木俊蔵来たる

一月二二日 加納屋、久保木俊蔵、大師河原へ行く

一月二七日 薄曇 八時後雨天 予(忠誨)、久保木俊蔵、

加納屋、人形芝居へ行く

三月二日 晴天 津宮先生入来

三月九日 晴天 津宮先生、予、高橋侯へ行く 但し、

先生は、直ちに帰り、予は御役所(浅草司天

台)に寄る

三月一八日 晴天 予、七時頃津宮先生と深川八幡へ行く

五月八日 今夜、予、津宮先生同道、薬師へ行く

五月一五日 薄曇 予、津宮先生と大橋玄ユウの宅へ行き、

それより水戸様上屋敷御庭拝見に行く 総連

八人 それより帰り、予、津宮先生、両国開

帳へ行く



五月一七日 雨天 今朝、津宮先生帰国 予、保木、船まで送る行く

六月 五日 薄曇 予、御役所へ行く 序文下書き、津宮より来たる

※七月一〇日 曇天 五時過ぎ、下河辺、永井、門谷、吉川、予、大手より御申しの故行く 高橋先生を待つ 先生来たり、程なく大広間へ 京より西の方大図十四巻開き繋ぐ 中図・小図また繋ぐ 御老中、若年寄御覽遊ばれ、また、諸巻まき納め、御目村衆へ伝言して諸箱を置き帰る 八時半過ぎ帰宅

※七月一日 永井、中図を摂津守（堀田正敦）様へ持参

文政四年八月 二日 予、御役所へ行く 先生入来、但し、津宮先生也

八月 三日 津宮先生、加納屋、飯田町へ行く

八月 四日 津宮先生、加納屋、暮頃帰る

八月 六日 予、御役所へ行く 昼仕舞い帰る 津宮先生帰国故也 行徳川岸にて逢い、暇乞い

十月 二三日 佐原宅 久保木太郎右衛門来たる

十月 二四日 津宮太郎右衛門へ行く

十月 二五日 伯母、津宮久保木太郎右衛門宅へ行く

十月 一六日 津宮先生来駕

十月 一七日 予、平右衛門同道、津宮先生宅へ行く 吸い物、御盆、刺身等出る。

十月 二二日 久保木俊蔵来たる 吸い物、酒等出す

文政五年三月二二日 江戸 久保木俊蔵帰国

六月 一三日 一昨日、順助方へ唐紙持たせ上げ置き候 津

宮先生より頼まれ候事故、順助云う  
※八月二四日 伯母死去

一二月 二七日 佐原 久保木俊蔵来たる

文政六年一月 六日 予、治郎右衛門、七左衛門、久兵衛、茂兵衛、

忠吉、文蔵、儀八等、津宮久保木、及び、加納へ年始の挨拶に行く 酒、飯を出す

文政七年一月 六日 予、久兵衛、忠吉、儀八、千代松相連れ津宮

先生、加納屋へ行く 餅飯出し、暮れに帰宅 予、忠吉、半兵衛連れ、香取参詣 直ちに忠

吉を津宮へ遣わす

一月 一六日 久兵衛を津宮へ遣わす

六月 二三日 緋にて加納屋同道、津宮へ行く

六月 二八日 津宮先生外孫死去の由、佐右衛門を悔やみに

九月 二日 久兵衛を津宮へ遣わす 「遣わす

九月 二日 久保木太郎右衛門来たる

九月 二四日 久保木太郎右衛門来たる

十月 四日 七左衛門来たる 幸十郎同道、尤も是より津

宮先生入門に参る由

文政八年一月一〇日 予、久保木太郎右衛門へ年礼

一月 二一日 津宮先生入来

五月 八日 予、加納屋治兵衛同道、久保木太郎右衛門へ行く

七月 一日 予、津宮加納屋へ行き、中食し、昼後、先生

へ行く 論語、並びに世説、講釈を聞き、又、加納屋へ帰り、直ちに帰宅

文政九年一月一〇日 予、久兵衛、庄助、忠吉、平右衛門、小太郎、

#### 四、伊能忠敬の画像

伊能忠敬の唯一の肖像画である「伊能忠敬肖像画」は、伊能忠敬記念館に保管されている。画像には、忠敬の坐像の上に、「賛」が書かれている。

##### ○ 伊能忠敬肖像画の賛

辱知弟久保木清淵拜書

○読み方

能令余慶	在児孫	家門業を修え	前烈より篤し
知是勤渠	不朽事	地域図を成し	国恩に報ゆ
地域成図	報国恩	知る是れ勤渠	不朽の事
家門修業	篤前烈	能く余慶して	児孫に在らしむ

##### 「意味」

家業をおえ、前々からの家の事を守ってやつたのである。その仕事は、地域の図を作り、国恩に報えたことである。よく勤めたことが、不朽の事であった。よく仕事をして、喜びが、子孫に伝わる。おろかな弟である久保木清淵拜書

伊能忠敬肖像画の筆者について、『伊能忠敬』(大谷亮吉編著)では、『伊能忠敬日記』の文政四年三月十五日の条に、

青木勝次郎来たる。祖父の画像持参。

続いて、同年三月二十日の条に、

余、三宅へ祖父の画像の表具を頼みに行く。

を依拠として、「青木勝次郎であろう」と、いつている。

久保木清淵家では、

「伊能忠敬の肖像画は、上部の賛と同じ人が描いているので、画の方には作者名を入れなかった。これを併題といって、作者が同じ場合は、このようにしても不思議ではない。久保木清淵の人物画は、『警狄記聞』にも、彩色したロシア人が描かれている」と、いつている。

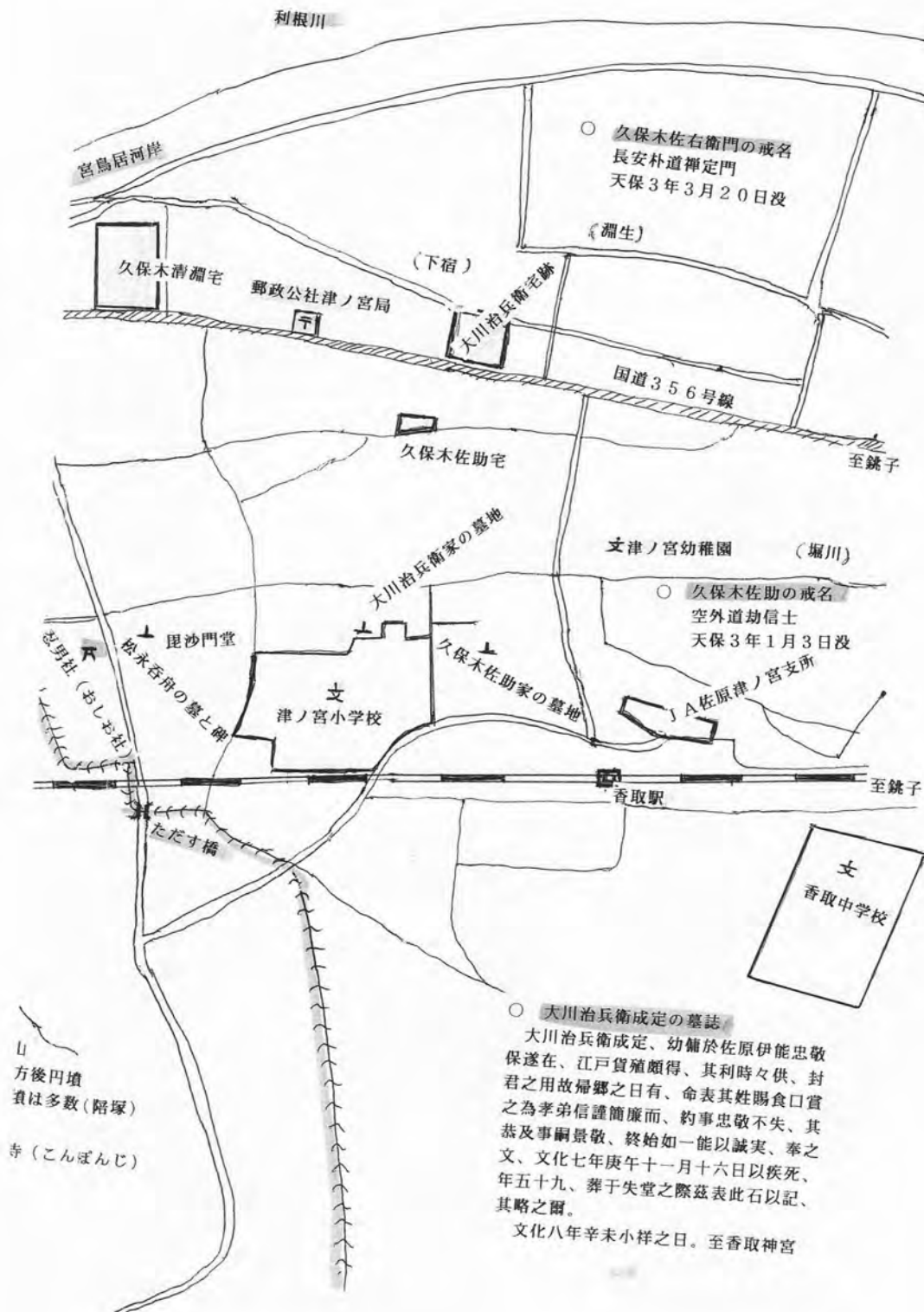
また、「賛」は、左から右へと書かれている。普通と反対に書いているのは、右から左へと書くと、忠敬の額に自分の名がきて、忠敬に対して失礼になるといったことからの配慮である。このような賛の書き方は、林子平肖像にも見られる(久保木良氏談)。(つづく)

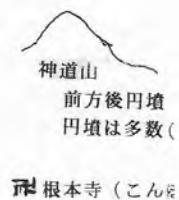


清淵描画のロシア人

『警狄記聞』より

佐原市立中央図書館保管





## 伊能蝦夷図と間宮林蔵 余話 井口 利夫

本誌41号に拙文「間宮林蔵の東蝦夷地測量―文政上呈図にその足跡を探す―」を掲載して頂きました。推論の主旨については、幸いにも好意的に受け入れて頂けたようで、いささかホツとしております。

この間二、三の方から、伊能蝦夷図が間宮林蔵の測量によるものだったら、最早、伊能間宮図とは言えないのではないか、という御意見を承りました。この点について、言い出しつべとしての筆者の考え方を述べておく義務が有ろうかと考え、一筆させて頂く次第です。

伊能忠敬の業績についての全体を評価出来るような立場にはありませんが、寛政蝦夷地測量から文政上呈図完成までを眺めての印象では、伊能忠敬は一貫して全国測量のプロジェクター役であつたと考えられます。従って、間宮林蔵による蝦夷地測量は、あくまでも伊能忠敬の弟子として、伊能忠敬の委託を受けての測量でしょうから、伊能測量隊の蝦夷地測量枝隊の位置付けと考えてよいと思われまふ。伊能図の中には伊能忠敬が直接測量したのでは無い部分は何箇所もあるはずですが、含めて「伊能図」というのは、伊能プロジェクトの成果としてその呼称に全く違和感が無いからに他なりません。それにもかかわらず蝦夷図のみが「伊能間宮図」と俗称されているのは、本図完成に当たつての間宮林蔵の貢献度が抜きん出ていたことを、多くの人が認めてきたからに違いありません。

今回の拙文に係わる研究の結果によつて、「蝦夷地測量における間宮林蔵の貢献度が従来考えられていたよりは更に大きかつた」ことが判つたということであつて、伊能忠敬の第一次蝦夷地測量の決行・緯度天測の成果という巨大な業績がいささかも色褪せることがある筈は

ありません。

従つて、今後の研究の結果によつて、文政上呈蝦夷図が絶て間宮林蔵の改測であると実証されるようなことになつたとしても、伊能蝦夷図が「伊能間宮図」であることに変わりはないと考えます。

(いぐち としお・室蘭市)

### 忠敬ウオーク再び

数合 信也

忠敬の墓つつましく新樹光

観福寺

ウオークの列整然と植田風

黒揚羽ひらりひらりと十二橋

先頭は御用の旗よ梅雨に入る

竹落葉宗吾旧居へ径折れて

夏草や風土記の丘の古墳群

夏わらび眼下に沼のひろごりて

夏草の刈られてゐたる閑所跡

枇杷熟るる堤をはなれ街に入る

横綱を育てし寺よ松の芯

善養寺

黒南風や江戸川・江東水に沿ひ

梅雨晴間骨董市にまぎれをり

富岡八幡宮

(すこ) しんや・元公立中学教員、佐原市)





## 忠敬談話室だより

思いがけなく然り気無く 山本公之

団地の高齢者クラブ日帰りバス旅行に、あんまり期待しないで参加しました。行き先は人類が海に挑み、海に向こうとの交流には欠かせない「船の科学館」見学、そして竹芝埠頭から東京港を一周りして次は、私が今日一番のお目当ての葛西臨海水族園へと気持ち弾んだ時だった。「皆様、この辺りは伊能忠敬が全国測量に出た頃は一面海でしたが今は埋め立てられ……」「えー」。バスガイドさんは皆さん御存じのという具合でした。私は嬉しさをしみにと味わった一日でした。何故かつて、日本全国走っている観光バスのガイドさんが「伊能忠敬」を然り気無く紹介しているのかと、思いがけない嬉しさ。

さて、次の日はというと上野にある国立科学博物館での東芝130周年記念イベント・和時計の最高傑作「万年自鳴鐘（万年時計）」の復元、複製プロジェクトのシンポジウムに参加することが出来ました。

万年時計は、わが国のモノづくり原点。いま日本の創造力をさぐる旅が始まった。技と



美の精緻は目を瞠るものがある。その時計の上部に半球のガラスをはめた天頂部が存在し、日本地図が描かれ円盤の上を太陽と月がまわる仕掛けになっています。ガラス越しにその地図を見て直ぐ率直に「若しかして、伊能図が関係しているのではないか」と感じた人は極く僅かでしょう。

通称からくり儀右衛門 本名田中久重 中でも「弓曳童子」が有名で、その多くのからくり技術の総決算として「萬歳自鳴鐘」通称万年時計なるものを1851年（嘉永4年）に製作しました。一年の歳月をかけたこの万年時計を、かれはもともと手ばなす気はなかったやうで、大切に保管され、現在も昔のままの美しい姿を保っています。歯車とゼンマイの小宇宙の「復元版・萬年時計」として、愛知万博では人類の歴史的発明品の数々を展示する「グローバルハウス」でご覧になられたことでしょう。

小説「田中久重」明治維新を動かした天才技術者——童門冬二著の陰陽道と蘭学の入門に似ている』そして『決定的な一期一会の出会いを体験させたのは、何といつてもその元恭の許にいた門人たちのユニークさである。佐野栄寿左衛門・陸奥宗光・中村奇助・石黒寛二など。特に佐野常民となつた佐野栄寿左衛門との出会いは決定的なものだった。

久重は五十二才、これに対し広瀬元恭は、まだ三十を出たばかりの若者である。「わたしはまだ師というに相応しくない一介のオランダ医者です。一緒に学びましょう」と謙虚な対応だった」とある。

日本一のからくり師 風巻弦一著——P117より引用  
——によれば、43才のときに京都で麻田剛立の流れを汲む時計師戸田東三郎に入門し、天文・数理を約七年、同じ京都の天文暦学の総本家土御門家に入門、久重という名前をもらった。儀右衛門はこの名前をだんだん使うようになったとあれば、本名は儀右衛門で、久重を名乗ったことになったのが正しいかな。そもそも、「あの日本地図はどこから引用されたのか」でした。「記して以て本編の終尾となす」で終る大谷亮吉著「伊能忠敬」、そ

のラストは(二十九)戸田東三郎、大野彌三郎等なのである。忠敬の要望に答えた「ものづくり」の象徴がこの「伊能図」になったのではないだろうか。

以上愚かな推測を以て、走り書きを、恥を知りつつ終えるとします。

(やまもと きみゆき・小平市)

\* \* \*

### 歩いて感じたTXへの期待 川上 清

8月24日に国土地理院のあるつくば市と秋葉原間につくばエクスプレス(TX)が開通します。今世紀中には次を期待できない画期的なできごとです。茨城県は全県を挙げて喜んでいますがそれは東京も埼玉も千葉も同じでした。

開業まであと一週間の17日、私は仲間と二人でTX埼玉以南の駅を調査目的で歩いた。茨城県ウオーキング協会は全駅をつなぐ開業記念ウオークを9月4日に始める。

この日は武蔵野線南流山駅からスタート。同駅や六町、青井、北千住、新御徒町のように整備が済んだと思える所と三郷中央、八潮、南千住など、周辺土木や道路工事が懸命に続く駅とに二分された。ゴールの秋葉原駅はJRとは独立の広場を持ち、さすが見学や照会

の人の出入りが多かった。路線途中の地上部では試験車両が密に走り、駅コーナーでは新しい駅員さんたちがまめまめしく応対していた。

北千住の商店街や佐竹商店街に小旗が並び、浅草仲見世には大型看板が連なっていた。各駅の赤い駅名表示が新鮮で印象的。24日には私も初日搭乗の感激を味わいたいと思った一日となった。

霞ヶ浦に秋風立ちて岸歩く

共にあびたり荒水しづき

(かわかみ きよし・水戸市)



\* \* \*

### 伊能忠敬の手法を再現 小林 清

8月7日に国土交通省提唱「道路ふれあい月間」のイベントに『伊能測量体験』を実施

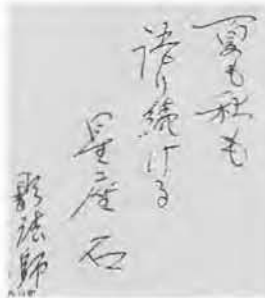
いたしました。体験希望者を公募しましたところ60名の希望者が炎天下で舞鶴市の東海岸1km程の海岸線を実測、交会法の目標点も対岸の前島埠頭を設定し、測点15ヶ所を手分けて測量しました。逆目方位盤も梵天も手製で、それぞれ20組こしらえ、間縄は現行の綿巻尺を使いました。(町・間・尺の理解が困難のため)予め測点に番付けを付し、初番杭より、上り下りの二方向に分けて測り、野帳に距離、方位角(測点間とその逆側、交会法の目標点の角度)を記録し、1/400白地図に測量記録を転記しました。仕上げは上々でした。

当日、測量体験後、会員の横川淳一郎氏に「伊能忠敬の測量とその素顔」と題して講演をいただきました。

(こばやし きよし・舞鶴市)

\* \* \*

### 「天道幽玄」から 武川 芳男



□各地に博物館がオープン

新たな古文書、地図に期待！

山梨県立博物館 山梨県笛吹市

10月15日開館



九州国立博物館 福岡県太宰府市

10月16日開館



長崎歴史文化博物館 長崎市

11月3日開館



□生誕記念祭メモリー

1985年(昭和60年)新潟県岩船史料紹介「測量」誌85年7月号から9月号に「伊能忠敬の越後岩船郡内沿海測量―伴田与惣左衛門覚書より」が当時の新潟県立村上桜ヶ丘高校、風間廣吉先生から紹介されている。

『今年は伊能忠敬生誕240年に当たる。地元の千葉県佐原市では5月17日の命日を中心に、偉業を偲ぶ各種の記念行事が催された』と始まっている。村上市の素封家伴田家に伝わる「与惣左衛門覚書」を全文解説と測量日記との対比も行っている。筆者の思い入れに伯寛与惣左衛門所懐の和歌が記されている。

奇きの星を南の空清く

雲吹はらへ秋の小夜風

潮かに影見る星とも共に

この郷の名もせ々に曇らじ



コピーを新潟の垣見さんから送っていただきました。いずれ全文掲載が出来ればと考えています。

1995年(平成7年)11月6日

記念切手が発行されました。

伊能忠敬・地理学者―生誕250年―



□受贈書目 事務所の記念書棚へ

伊能忠敬測量隊の記録 三重県発行



内容は35頁参照  
植田浩一さんからのご寄贈です。



□日々の話題から  
月刊「コレジオ」が発刊

芳賀さんの出版社からです。

<http://www.collegio.jp>



□久保木良著「香取・津宮 佐原まち」  
1988年3月 聚海書林

以上二冊事務局蒐集



□「歴史研究第409号特集伊能忠敬の謎」  
1995年6月発行 新人物往来社  
伊能忠敬の基礎知識 佐久間達夫



□地図中心9月号から 日本地図センター発行

特集「世界自然遺産知床」に会員三人が登場。高木崇世芝さんがご自身所蔵「知床を紹介したいろいろな地図」、山下和正さんは古地図連載「改正陸奥磐城城疆界路程全図」、鈴木純子さんも絵葉書地図連載「鎌倉名勝案内圖」です。

お知らせ

□伊能大図展の予定

□地図展2005 in 静岡

11月18日〜20日

「ツインメッセ静岡」

静岡市駿河区曲金3-1-10

大図規模―中部地区

伊能大図コーナー

□鳥取市歴史博物館

11月18日〜27日

大図規模―中国地区

□高知県立歴史民俗資料館

2006年1月7日〜22日

大図規模―四国地区

□旭川・クリスタルホール

2006年9月5日〜10日

大図規模―全国

□新特別会員です。どうぞよろしく

学校法人根津育英会

武蔵大学、武蔵高等・中学校

□ホームページNEW

坂本さんの資料室

(1)研究会報 NEW  
(2)研究会行事 NEW

□「本の窓」12月号

小学館の月刊PR

誌『平成大合併日本新地図』で「忠敬の地図作り」について渡辺名誉代表が執筆予定です。

11月下旬発行。

月刊  
**本の窓**  
定価100円  
小学館

□「タモリ倶楽部」に星望代表出演

10月28日深夜0・15〜45（関東圏）テレビ朝日系。この番組は今年で22年目を迎える長寿番組。地図センターを訪問し地図三昧のひとつを味わうという企画。研究会は大図の紹介。地図センター倉庫の地図探

しなど。

## 伊能忠敬研究会 御案内

- 一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどこでも入会できます。
- 二、つぎのような活動をおこなっております。

### ①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

### ②例会・見学会の開催

### ③忠敬関連イベントの主催または共催

### ④その他付帯する事業

- 三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万元を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

⑤ (04年8月に事務所は新宿区下宮比町から移転いたしました)  
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax 03-3466-9752

事務局メール fuku-inh@gj9.so-net.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

### 投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。話題、各種情報、近況などお便りをお待ちしています。

## 伊能忠敬研究会のホームページ

ホームページは秋葉武晃さんが担当しています。

<http://inoh-tadataka.org/>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事です。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図、会報の話題など御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrim.or.jp/~koko>

### 編集後記

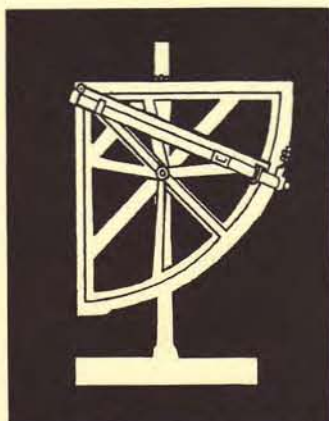
目黒大橋、事務所周りの金木屋から今年も良い香りが◇東京駅から終焉の地「亀鳴町」の途中にアイヌ文化交流センター。「ネンネヤツカヘノイパヤン」とはアイヌ語で「誰でも立ち寄ってください」という意味だそうです。地図は松浦竹四郎著東西蝦夷地理取調圖がありましたが。伊能図に比べて地名の多さには改めて感心。海岸線にも内陸にもです◇2008年は北京オリンピック。2010年は全国規模の「伊能ウォーク」が計画されています。この年は上海で万博、奈良県は平成遷都千三百周年イベントに動き出しています◇2000年の伊能ウォークでは日本地図センター主催で「地図コンテスト」が行われました。ふるさとを考えるとともに広く測量や地図に関心をと地図を児童から募集しました。各地を訪れることに見事な絵地図に出会いました。ふと思いましたが、当時の小学五年生は今元氣な高校生でしょう◇上野、東博の特別陳列「キリシタン関係遺品」へ。「ロザリオの聖母」を描いた銅牌は木にはめ込まれ板踏絵に。五つとも長崎奉行所旧蔵品です◇今年も皆様の暖かいご支援ご協力に厚く御礼申し上げます(Ｆ)



# THE INOH TADATAKA JOURNAL

## STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.42 2005



Tadataka's Profile	
The Islands of Mandarin and The Sea of Aki	Inoh Hiroshi 1
Contribution	
The 200th Anniversary Event of the Inoh's Survey in Osaka	Yaguchi Akira 2
Search For Inoh Maps	
A Visit to Small-Scale Inoh Map	Hoshino Yoshihisa 4
The Search for Von Siebold's Footmarks	Watanabe Ichiro 8
Topics	
"The Map Laboratory" in Kamejimacho and Inoh Maps	Makibuchi Akira 16
The Survey Map of Konaguchi in Sawara Village	Sakuma Tatuo 20
"The Offering Flowers Meeting to Tadataka"	
by Kokura-Kensyokai	Ishikawa Seiichi 25
My Encounter with Inoh's Maps	Akiyoshi Masaaki 26
A Tree Just Like a Poet	Takeda Takeshi 28
A Rough sketch of Tone River	Eguchi Toshiko 32
The Records of Inoh Surveys Published by Mie Prefecture	Editorial Department 35
"The Tadataka Walk" Again	Sugoh Shinya 60
MATERIALS	
A Short Sword Reminds us of Ida-Inabanokami	Ginbo Makoto 33
The Connection between Onihei and Tadataka	Ando Yukiko 36
Hakoda Ryosuke's Scion Son: Enomoto Takeaki	Itoh Eiko 44
The Pledge between Inoh Tadataka and Kuboki Seien (1)	Sakuma Tatuo 51
The Map of Tsunomiya Area in Sawara City	Sakuma Tatuo 58
Inoh's Ezo Maps and Mamiya Rinzo: Digress	Iguchi Toshio 60
Meeting Room	
Unexpectedly and Fortunately	Yamamoto Kimiyuki 61
My Expectations to TX	Kawakami Kiyoshi 62
Reproduceing Inoh Tadataka's Method	Kobayashi Kiyoshi 62
Information The Exhibition of Large-Scale Inoh Maps	Editorial Department 63

Edited and Published  
by  
THE INOH TADATAKA SOCIETY